明治廿七年二月五日發刊

女鑑

第五十六號

東京國光社

女鑑第五十六號目次

紅梅の内侍



女鑑　第五十六號

女鑑

無益の談話を愼むべし

世の人、あひあふ時、しばらくも默止することなし。必、言葉あり。其の言をきくに、多くは、無益の談なり。世間の浮說、人の是非、自他のために、失おほく、得すくなし。これを語ること、互の心に、無益のことなりと謂ふことを知らず。と、吉田兼好がものせし如く、實に、人の相會するときは、其の談話の間に、有益なることばかりはなくして、徒なる空言、浮說に、貴重なる時間を過ぐし、彼にも利なく、我にも益なくして、さて止むこと、世間、其の類極めて多し。これ、固より、利益なきを望みて、然るにはあらざれども、唯、其の浮說、雑談の、心に

合ふがまに〳〵、覺えず識らず、其の弊に陥るものにして、必竟は、其の精神を、確に定めず、志操を、固く持せざるより、心、常に、浮動して定まらず、解放して收め難きによりて、遂には、其の甚しきに至れるものなり。唐土の孟軻といへる人の言にも、學問之道、無他。求其放心而已。とありて、人の、書讀み、物學ぶは、みな、其の天賦の、善良なるところを養ひ長じて、其の過失の少からんことを務むるにあることなれば、先、第一に、其の志を立て、其の心を留め、朝夕の別なく、つかの間も、道に離れたる外を思ふべきにあらず。若、其の志を定めず、其の心を用ゐずして、其の氣隨に任すときは、必、過の出で來るものなること、論を待たざるなり。

されば、賢者は、言行を愼むを以て、第一の務とし、獨を愼むを以て、重要の

ことゝなせり。人に、言語はど、重要なるものなければ、之を用うるには、必、其の用うべきところに使ふべし。無益にして、害あるが如き無用の談話を爲して、徒に、此の貴重なる時間を費すは、眞に、大なる過といふべし。然るに、世の人々は、多く、こゝに心付かずして、五百年前、兼好の評せしところを、今日に受くるもの、甚、夥し。わきて、婦人の社界には、いとゞ多し。苟、今日の世にありて、眞正なる人とならんとするものは、最、その言語と、躬行とに注意せざるべからず。談話、豈、かろ〴〵しくすべきものならめやは。言語談話には、其の人の心底も、殘なく見ゆるものなれば、德あるも、德なきも、みな、一時に知らるゝぞかし、故に、人の、最愼むべきは、言語にこそ。ことに、婦人の、最愼むべきは、無用の談話にこそ。

論說

樂は極むべからざること

岩下方平

凡、事物の理は、變化して止まざるものなり。故に、人の世に處するに道は、すべて、意を此に留めざるべからず。其の變化の理とは、猶、四時の變るが如く、草木の榮枯あるが如く、極まりあることなし。譬へば陽春駘蕩の時には、萬物、皆、青々として、將に、蕃茂せんとし、百芳、皆、芳菲を發し、英華を鬪はし、日暖に、風輕く、其の好景と春意とは人の情意をして、自、悠然として安く、優游して娛樂せしむ。然れども、此の好氣候は常に存するものにあらず。一朝、東風雨を送り、百芳、皆、謝し、綠樹陰々として、薫風橘花の香を送るに及べば、先に、身に適ふの温暖は、自然に熱度を増し、陽氣日々に盛にして、萬物、皆蕃

り、天地間の景狀は、自、一變しぬ、是れより日を逐ふて、炎熱酷暑と變り行けば、人の感情、亦、春日の比にあらずして、之を厭ひ苦しむもの隨つて多きにいたるべし。かく變化して、其の極度に達するときは、其の上、尙、進むこと一步なること能はず。是に於て、一變して、復、退步することあるは、則、天地間自然に存在せる定理なり。故に陽炎の氣其の極に達すれば、陰凉の氣、亦、其中に萠し一雨の過ぐる每に、必、一掬の凉味を增し、遂には、秋氣爽凉、天澄み日朗かなるの好時節となり、人の心胸をして覺えず快豁ならしむ。然れども、其の漸く深きに及べば、肅殺の氣、荒凉寂寥として、悲風霜を拂ひ、天色慘澹として、自然に哀痛の情を促すものあり。之れ秋の最極まる所なり。尙、一轉しては、嚴冬窮陰の時となり、積雪堅氷、寒風凛冽人の肌骨に砭するの甚しき

に至りて極まる、窮りて又、變ずるもの歳々止むことなし。四時の變化する所以と万象の更新する所以とは、既に此の如し、人事の變化、豈に獨り然らざるを得んや。

人の心の中には、種々の境遇によりて、種々の希望を生ずるものにて、此の希望は、時と共に移り變りて止むことなきものなり。口の味に於ける、目の色に於ける、鼻の香に於ける、四肢の安逸に於けるは、其の最も甚しきものにて、人々、其の慾を放にし情を肆にして、其の娯樂を極めんとするは、天下一般に、皆、然らざるものなきが如し。然れども、是れ大に愼まざるべからざる所なり。古人の語にも「志は滿つべからず、樂みは極むべからず、傲は長ずべからず、欲は縱にすべからず。」などいへる如く、心の欲する所も、情の望む所も、皆、

能く其の程を制して、情を正しくするを、能く其の心を正しくし、其の意を誠にして、其の身を修むることを知ると謂ふべし。

人は、何故に、かく、其の情を節して、其の行ひを修めざるべからざるかと謂ふに、是れ則、前に述ぶる如く、事物の定理ありて、滿れば、必、缺ぐることあり。盛なれば、必、衰ふることあり。樂みあれば、悲み、必、來り、萬事總て此の理に外なることなければ、常に其の身の安からんことを願はゞ、必、其の心の望みをして、其の極に達せざらしむるより外に、策も法もなきものなり、故に古へよりして、深く誡め、堅く愼みて、以て、其の幸慶壽康を保つべきの法を設け立てゝ、人生一般の敎へとなせるなり。

諺に樂は苦の種、苦は樂の種といへるも、右の理と全く同一にして、樂みを極

めて止まざれば、必、其の財は盡き、其産業は傾き、其の家をも失ひ、其の身をも亡ぼすにも至るべし。是、豈、苦の種なるにあらずや、されば、其の程を制して、其の甚しきに至らざるを以て、平常の心得とするものは、大なる樂みなけれども、亦、大なる苦みをも受けざるは、則、之を節制するの効果なりと謂ふべし。婦人女子は、又、尤、樂みを極むるを厭ふの性ありと雖、或は、美服に財を惜まず、優遊して日を送るの弊あるものあり。此等は、則、苦の種を蒔ものなれば。余は、人々の、深く省み、遠く慮て、之を古今に鑑み、之を天地自然の理に本けて、自、其の殃を取ることなからんことを望むのみ。

和といふことに就いて

大林弘一郎

和とは、物の能く打ち解けて相互にやわらぎ合するを謂ふなり。凡、人間の道に於て、此の和といへること程、必用なるものはあらじ。春日の暖かなるに逢ひては、人心、自、相和らぎて、穏かなるが如く、人情の、互に能く、相睦び親むは、則、人倫の、能く、其の序を得る所以にして、人事の、能く、滞りなく、行はるゝものは、皆、是れ、和の徳なり。

さて、此の和なるものも、猥に、打ち解け、和き睦ふの謂ひにあらず。人の交際には、必、禮と敬とを以て第一とする故に、萬事、總て、禮に違ず、敬を失はず、而して、其の間に和を用ゐて、其の情を和らげ、其の誠を盡すべきなり、禮は、人の行儀作法より、萬般の注意すべき所爲等に至るまで、一々、其の正

當の所を得て、秩序階級の整然たるを要旨とすることとなれば、必、和寧歡樂の情を以て、之を和らげ、親愛の誠を以て之を合せて、相離れざらしむ、故に、和寧は禮の用なり、などいへる言ありて、和を以て、禮を行ふの要となすなり、和の用たる、此の如く廣大なるものなれども、別て、夫妻の間に於て、古より、之を重じ來れるものは、抑、何の故にやと、深く此の際に考へを廻らすべきことなり、是、必、其の故あることとなるべし。

夫、人の男女あるは、自然の理なれども、其の同じく室に居るに至りては、人の大倫とも謂ふべきものなれば、其の愼重すべきこと、固より、言までもなし。されば、此の際に方りの心得なるものは、必、正しからざるべからず。故に、男女別ありと謂へることありて、其の相押ざるを貴び、義理を正して相交らしめ、

而して、又、其の相離れんを慮りては、相和すると謂ふことを以て、其の相親愛するの情をして、永遠恒久ならしむるなり。故に、夫婦の道は、別あると相和するとの二つより外なし。別ある故に、能く和樂歡合して、狎れ亂るゝの憂なく、相和する故に、能く、其の分限を正しくしても、相離れ疎んずるの虞なし。此の如きを能く人倫を修め、人道を行ふといふ。是則、其の恒久なる所以の本なり。人の一生は、固より、平安無事にして、而かも康壽なる程、望み願はしきことはあらじ。人々の望む所のもの、此より甚だしきはあらざるべし。而して能く之を得るものは、十の五六もあらざるべし、是、其の天運の如何にもよるべけれども、多くは、其の行儀禮法を遵行せざるより、其の幸福を失なへるなり、然れば、能く、其の失を知るものは、必、其の始めの、感情歡樂を恒久に

保たんとするに、和と別とを重じ愼みて、妻子好翕、如鼓瑟琴と謂へる如く、室家の內、洋々たる和氣充渡りて、年月を經るに至らしむるなり。殊に、此の際には、婦人は貞一字を以て心の守、身の掟となすべきことなり。貞正の德、其の身に存して、少も變ずることなきは、誠に、其の歡樂を全うし、恒久の幸福を享くるの基なりと謂ふべし。

女子要言　第二篇　(廿八)

三輪田眞佐子

然らば、達才にある乎。曰はく、否。一を聞きて十を知り、雄辨滔々、能く論じ、能く案じ、恒に、良人を指導し、家務、悉、獨斷に行ひて憚らざる女子あり。思ふに、達才の用は、人を益する、多しと雖、亢龍、尙、悔ありとかや。況、陰

性の女子、陽性の男子を凌げば、勢、牝鷄、晨に鳴く禍を買ふに至らざるを得ず。好し、禍を買ふに至らずとも、才氣に過る女子は、反りて、隣人、及び、家族より、敬して遠ざけられ、往々、其の才を施す所なうして、終はるにあらずや。既に、此の事に就きては、紫式部が、女子の品定に於いて、軒端の荻の空蟬と、碁を圍むとき、活潑にして、達才めきたるを評して、いよのゆげたも、たゞたどしかるまじうみゆ。すこし、しなおくれたりと云ふあり。是、達才は、必しも、好人物にあらざるべしとの意ならん。

蓋、富貴の家に生まれ、富貴の家に嫁し、從ひて、言語も上品に、動作も平和に、且、出入には車馬あり。交際には閑日ありて、未、世には、其の短所の公になる機會なきにも拘らず、直に、好人物なりと思ふは誤なり。若、眞の人物の價値を知らん

とせば、國亂れて、忠臣顯れ、家貧しくして、良妻知らるゝとかや。故に、今日、富貴なる女子をも、其の零落の地位にあらば、如何ならんと假想して、好人物なりや、否やを定めざるべからず。見よ。春風吹けば、猶草さへも、青々たるを。獨、寒風凛冽のときにあらずば、未、松柏の操を知り難し。之に反して、赤貧洗ふ如く、恒に、糟糠を甞むる山村の女子にも、敢て、天眞を傷はずして、職分を果さんため、露を排して、桑葉を摘み、霜を踏みて、壞を撃ち、教へず、學ばずとも、天性、能く、父母を安んじ、良人に事へ、兒女を育つるもの少なからず。之をも、尙、此の女子にして、彼の位地にあらしめば如何と假想せで、直に、好人物にあらずと云ふものあらば、吾は肯ぜざるなり。果して然らば、人物高下の分かるゝ所は、貧富によらざるや、明けし。

女子の容貌の美麗なるは、天賦の幸運にして、亦、姿勢を高雅にするは、好みすべしと雖、時の流行を察し、俗に、粋と呼ばるゝ裝飾をなし、觀花に行き、劇場に入り、徒なる金錢の消費を顧みず、虚名を得んとて、交際をなし、偶、衆人より歎賞せらるゝも、決して、好人物に近きものと誤了する勿れ。揚貴妃は、其の美、婉々たる芙蓉を欺き、亦、姦才に長けたりとも、天下に、醜婦の名を得たる、齊の閔王の后宿瘤に及ばざる遠し。此の后、有名なれば、其の略傳を、玆に附記せん。閔王、嘗て、出遊したりしとき、偶、彼の女が、桑田に働き居たりしを、王、其の動作より、彼の女の非凡なるを知り、感ずる餘り、覺らず、此の女にして、頸に、瘤塊あるは、惜哉と告げられたりければ、彼の女、自若として、婢妾の職は、之を、不二に屬す。予、苟、之を忘れざれば、

瘤醜、何かあらん。と答へたりき。則、王、之を賢女として、共に載せ歸らんと謀りたりければ、亦、女子にして、父母の命を得ずして行くものは、奔女なり。と答へて、大に悅ばざりき。遂に、王、益、感じ、愈、禮を厚くし、聘して、以て、后となしたりしが、果して、后は、其の貌の、極めて醜なるに反して、心は、甚、美しかりければ、王を翼賛して、外、隣國を服せしめ、內、宮室を整へたりしとかや、是をこそ、好人物と云ふべけれ。

斯く案じ、斯く論ずれば、諸孃は、必、好人物とは、多藝のみに限らず、富且、美に由らざるとせば、果して、如何なる女子を以て、好人物とするやと問はん。是、吾が、玆に、答へんと欲する所なり。思ふに、好人物とは、先に述べし、嫉妬等の惡癖なきは勿論多く言はずして、能く行ひ、才藝に富むも、毫も、氣

色に顯さず、姿容美なるも、卑俗に流れずして、高雅なるにあり。若、醜なるも、何となく、上品に見え、靄然たる和氣は憐むべく、富貴なるも、敢て誇らずして、益、謙讓と、節儉とを守り、若、貧困なるも、天命を知りて、少しも亂れず、天職を怠らずして、恒に働き、殊に、事物の道理を、能く悟り、女子の天稟なる慈愛の情に富み、而して、父母、舅姑は、柱石と恃み、良人は、偕老の契を樂しみ、兒童は、天の如く仰ぎ、家僕は、神の如く敬し、外人は、悉、依賴し、其の言に由りて、人の怒を解き、怨を去るに至る妙力を有ち、且、女藝をも、能く知り、直接には、家内を整理し、間接には、社會を風化するに足る女子を、好人物と云ふべし。一言にして、之を約すれば、淑質にして、才幹ある女子なり。されど、徳と智とを兼ね得ざるものとして、女子は、徳を採ら

んか、才を擇らんかと云はゞ、勿論。德を先にすべし。漢書に、女子は、靜止の德、簡婉の言、周愼の功、閑雅の容を、四德とす。而して、之を備へば、才は拙、性は愚、家は貧、貌は陋なりと雖、其の賢を累はす能はず。若、之なければ、能は奇、慧は異、身は貴、姿は芳しと雖、其の惡を掩ふ能はずとあり。嘉言なるかな。

蓋、好人物たる資格は、富貴、及、才藝より分立して、淑質にして、才幹ある一點にありと雖、女德、智識、及、美貌までを兼備するものは、得て望むべからざる故に、吾は、先、好人物の眞髓を供ふる女子は、細末の欠點ありとも、先、好人物と云ふも可ならんと思ふ。されば、女子は、男子と異なる天禀を有し、從ひて、異なる天職を果すべきものなれば、建業的の才を尊ぶより、寧、

守成的の德を重んずべきなり。蓋、女子究學の目的たる、至善全能は望むべからざるも、至善全能なる好人物とならんことを期し、少くとも、之に近づかんことを願ふにあり。而して。既に、好人物たる以上は、其の資格の要素は、貧富に由りて、等差あることなしと雖、地位に從ひて、聊、外觀を異にするを以て、重復の恐あるに拘らず、便宜のため、更に、上中、及、下の三階級に分かち、好人物の本面目を述べん。

史談

紅梅の内侍

鹽井雨江

勅なれどいともかしこしうぐひすのやどはとゝはゞいかゞこたへむ

實に面白き歌の心かな。「勅なれどいともかしこし」との一言、海はあせ山は裂なむ世

なりどもとはいはざれど、まことに、君に二心あるべからずといふ心も見え、敷島の大和心も縋るになむ。はた、「鶯の宿はと問はゞいかゞ答へむ」との一節、罪なき小鳥を憫みたる心、草木のあはれをも知れる心、まことに、柔和しくも、面白き人の心かな。上をかしこみ、下ををしみ、君をたとふみ、草木を憐みたる、げに敷島のやまとの人の心なりけり。

世の中の敎への道は、儒といひ、聖といひ、宗とやらむ、道とやらむ、さま〴〵こちたきまでありといへど、そは、大かた唐人の寐言、異人の妖言のみ。やまと島根の人と成り、眞に、やまと島根の人とならむには、唯、此の歌の心、此の一節の誠だにあらむ、それにてよからむ。西敎、儒道、さる事は、此の國には、聽かず問はであれ。唯、ありたきは此の歌の丹心、此の歌の節のみ。

げに、おもしろき歌の心、いかならむ人の詠じけむ。詠みたる人の、なづかしくもあるかな。げに、なづかしきむかしの人は、紅梅の內侍といふ女子なりとかや。世にもかむばしき人のむかし、世にいふまゝを此所に書きつけなむ。

あはれ、此の歌人。此の紅梅の內侍。むかし村上天皇の大御代、天曆といふ頃のも

のなりとかいふ。遠き祖を尋ぬれど、かしこくも、孝元と申し奉る大君の、おほん流れをくみ、世に武内宿禰ときこゆる人の家より出でたれど、代々世に下りて、いやしききはにのみ在りけり。内侍の祖父は、紀望行といひて、歌に堪能の人なりけり。父は、又、古今和歌集の撰者の中にて、三十六歌仙には、左の一に撰ばれ、柿本人麿にくらべられたるほどにて、誠に、歌には荒神をも柔らげゝるほどの人、紀貫之といふ人なりけり。内侍は、此の貫之の女にて、はじめは、西の京に、もの淋しき住居したり。

げに、白氏の恨みにはあらねど、山苗はろく〳〵たれども、地の高きがゆゑに、おのづから世にも高く、澗松は秀でたれども、地の低きがゆゑに、遂に世の中に、高く時めくを得ず。げに、此の恨は、彼處も此處もおなじく、昔も今も變らぬぞかし。げに白居易がいひける、書を讀みて眼は愈くらく、筆を取りて、手には胝を結ぶも、遂に沈々たる朱門の中の、乳臭兒に越ゆるを得じといひける愁嘆は、あながちに、唐人の寢言とばかりきかむや。内侍の家、げに淋しき住居なりけり。

貫之の世に在りける時だに、僅五歲六歲、土佐へ行きて歸り來たれど、わが宿は、

守る人も思ふにまかせざれど、築土は崩壞るゝにまかせ、軒は朽つるにまかせて、與に古里のあれたる宿なりけりとは、日記の中に見えたり。人の在る日さへ、かゝりけり。ましてや、其の人なくなりたる後は如何なりけむ。姫小松の一本は、床しげに殘れども、誰れとて昔のゆかりと、訪ふ人も無し。さばかりの人の宿、かゝりける人の末、人知りて人の訪はざるに非ず、世に忘られて、遂に訪ふ人も無くなりにたる宿なりけり。谷の常盤松、枯れたるにあらねど、地は低うして、世に忘られたるなり。

かくて、世に忘られ果てたる父の宿、かゝる人も、くる人もあらざれど、繁るまゝなる宿の忍草、其の草よりも、なほしげきは、父を忍ぶ內侍の袖。思へど、露とやならむ忍ぶの宿。なほも昔を忍べとや、軒の紅梅の一本、むかしのさまに變らで咲きこぼれ、色も香も又いふ方もなきまゝに、內侍は、獨りつくづくと、ながめたまひける一日、絶えて音なき宿、何人ならむ、やゝやゝと音なひて、主人やまします、上よりの御懇望なり。こたび清涼殿のみ庭なりける、紅梅の立木、いかにしへらむ、枯れたれど、殘りをしき花やなとて、かしこきあたりのおん愁歎、限りもあらせら

れず、よき紅梅あらで、移し植ゑよとのお聲。京の中を、此處彼處尋ねたれど、よき木は絶えてあらず。西の京にもと思ひて、尋ねたる甲斐ありて、うれしくもおん身の宿の此の紅梅、花といひ枝といひ、上ありとも思はず。上に奏し奉りたるに、それ移し植ゑよとの仰せなり。おほん仰せなれどといふに、女子も、かしこきあたりの御言葉、梅の一本ばかり、何に惜しからむ。なほ二本三本をもと思ふばかり、何にか辭み奉るべき。唯々とばかりに承たまはりたり。

されど、見れどいとをしや。憐れなるは鶯。此を我宿と定めて、折りしも巣さへ結びてあり。ものはいはざれど、口はきかざれど、わが此の一本の梅の蔭を賴み來て、げに深く賴みたればこそ、巣をも營みて、ものはいはねど、かく卵をも、思ひ賴みであるならめ。さるを、今此のまゝ御庭に移しなば、げに紅梅こそは、榮もあれ。巣に在らむものも、九重の御庭にゆかむは、妙果なめれど、養ふ母鳥の在らずなりては、何にかは活きむ。まいて、母鳥は我宿見えず、我巣失せにしと知らば、悲嘆は、いかばかりならむ。人にしあらば、産屋なり、我床なり、我床見えず、産屋の見えずなるあらで、人の恨みにも較べてみむ鶯の心。思へば、これもふびんの

ものかな。さはいへ、かしこき大御言は、何時何處辭み奉らむやうもあらず。辭むべきものかは。

とかうする中に、梅ははや掘りかへされ、人々擡き出でんすれど、内侍は、何思ひけむ、暫時と呼びとゞめて、さゝやかなる短册を、紅梅の枝に結びかけたり。人人は何ともつかず、いそぎ御庭に擡きまゐりて、天皇の御覽に入れ奉りぬ。天皇は御覽せられ、花のかをりより、枝の姿まで、いたく御感ありて、御覽せあらせられしが、何やらむ結びかけたるものあり。あれは何ぞ、とく〳〵と仰せ玉ひて、讀ませ玉へる、一箇の短册の面に、筆も正しげに、

勅なればいともかしこし鶯の
やどはとゝはゞいかゞ答へむ

と一首の歌かきたるなり。天皇は、繰り返へし繰り返へし御覽じたるが、軈て御感に堪へぬおんけしきにて、あはれいしくもいひつるかな。心にくきばかりに、いひつるものかな。さても眞に、よしなき業したり、此の紅梅の在りつるは、如何ならむ

家ぞ。誰人の住居ぞと仰せありけれど、唯、西の京にて、あやしき家とのみにて、誰なりとも、如何なる人なりとも、知る人あらず。さては彼知りたらむ、これ知りたらむと、御尋ねあらせられければ、それなむ貫之の、むかしの宿なり、又ありつるは、その人の女なりといふ事知らせ給ひぬ。

此の天皇は、延喜天暦といひて、世に數へられ玉ふほどの大君にましませど、いたくひげなるおん好みを、われながら、くちをしうおぼしめされ、はた「勅なれば」の言の葉といひ、「鶯の」といふ心の柔和しさを、此上なくあはれにおぼさせられ、殊更に御使を賜ひて、宮中に召し出され、内侍と爲し給ひたり。ありつる紅梅のゆかりをくみ、紅梅の内侍と呼ばれて、宮の中にもてはやされけりとか。實に紅梅のゆかり、異に怪しきばかりにゆかしうなむ。そは、此の内侍、まことに、心の深き事、紅梅の色の濃きがごと、はた心のにほひは、眞に紅梅のかをりの清きがごとありけり。此の歌を見ても、此の心は、知られなむかし。

此の内侍は、流石に家の流れをくみ、父の筆を受けたれど、和歌にも堪能なりしといふ事は、此の勅なればの歌にても知れなむ。又西の京に、淋しうして住居たるは

どの樂にも、編みたるならむか。古今六帖どいひて、古今の歌の、めでたきを聚めたるあり。紀貫之の女の作れるなれバとて、世には、紀の六帖ともいふなり。此の事は、清輔袋草紙といふ書に、又本朝書籍目錄といふ書に見ゆ。今も此の是異りたり。六帖といふ書は、世に傳りてあれど、さま〴〵なる本ありて、和歌の數などは、彼こは、昔は活字あるは木版もて、書を印刷する事なくて、彼れより是れ、是れよりそれと、互に寫し傳へたれど、そが間に、他人が筆を加へたるも、其儘寫つすより、かゝる異本も出で來にけむ。あるは、此の六帖は、紅梅の內侍の撰びたるには非ず、古今集の前より、はや在りたるものならむなどいふ。いかにや。餘りに穿ち過ぎ、思ひ過ぐしたる說ならむ。今一段、考ふべき事ならむ。おそらくおのれは、袋草紙、書籍目錄、大日本史などによりて、內侍の作と記すになむ。

此の六帖といふは、唯に我歌を聚めたるなれど、其の和歌の部類を分ちしさま、勅撰集などゝ、異りて、なか〳〵に面白し。第一帖には、歲時、天象。第二第三の二帖は、地儀。第四帖は、戀、祝、別。第五帖には雜思。第六帖は、草、虫、木、鳥などゝ、分類を分ち、何ともあらねど、草虫木鳥などゝ、書きたるさま、才筆のあと

多かり。

あはれ、此の紅梅の内侍。世の人は、唯にいみじき才女とのみいひ、「勅なれや」名吟、流石に歌人の女なりといふのみ。さるからに、眞にあさましの世のさまと、嘆息せでは叶はぬなり。才をのみ問はゞ、紅梅の内侍に勝る者もあらむ。和歌の姿のめでたきを問はゞ、他に又名歌の秀れたる多かり。余、唯、紅梅の内侍をなづかしく思ふは、其の心ざまの、あはれなるが、なづかしきなり。雨江が「勅なれや」の歌をめづるも、詠みけむ人の心の、いふにいはれず、面白きが故なり。其の心、飽まで柔和しきが中に、やまと心も、露ばかり忘れず、誠に柔和しく清くあるが上に、赤心ふかく、一流の節義も正しく、げに秋津島根の女子といはむ人の鑑と思ふになむ。其の人の、なづかしうあはれに思はれて、かくは書きつゞるになむ。

あはれ此の文、讀まむ敷島のやまと島根の、日本女子たち。儒道をも、かしかましく論ひ給ふに及ばず、宗教をも、一心に念じ玉ふに及はず。唯、此の歌の心、此の紅梅の内侍の心を習ひ給はゞ、あつぱれ日本の女子といひて、ゆめ恥づかしからず、眞に日本男兒の妻となり、眞に日本の人の母と成りなむ。

羽前の志も女が事

蒲城弘

おのれ、此頃、つれ〴〵のあまり、或る書、くりひろげつるに、志も女と久次のことありて、感じたる節多かりければ、こをぬき書して貴社に贈りて、女鑑の餘白を汚すになむ。

羽前國鹽野村に、久次といへるものあり。妻を志もといふ。夫婦ながら、資性篤實ある者にて、怠らず農業を勉めけるが、もとより、田畠とてもおほからねば、近年物ごと高價になれるより、いやましに、困窮に逼りけり。母なるもの、慶應二年八月より、疝瘕になやみて、醫療を加へつれども、其の驗もなく、すぎゆくほどに、おなじき四年の五月の頃より、また、眼病にわづらひて、日々に痛つよく、つひに、兩眼ともに、見えずなりにけり。これより夫婦の者、いよ〳〵孝養に心を盡せども、眼病以來は、ことさらに、衰弱もつよく、かてゝ加へて、持病の疝瘕さへ、甚しかりければ、小國小玉川の溫泉は、かゝる症に驗あるよし、いへる人のあるを聞て、母にすゝめ、おなじとしの七月、かしこにいざなひゆき、ひるよる心をつけて、往來は、

久次背におひつゝ、湯壺のおりあがりをさせ、朝夕は、口に適ふ物をとゝのへて、食事をすゝめ、取扱ひたりけるを、みる人みな感じたりけりとぞ。その鹽野村より、小玉川までは、二十餘里隔り、近からぬ路のほどにて、嶮岨なる山坂のみなるを、酷暑の時ともいはず、篤疾の母を脊負ながら、往返して、貧しき身なれど、路用とても不足なれど、しれる人に借りとゝのへ、保護手を盡しければ、母も病苦をわすれて、いたくよろこびたりしとなん。かくて、温泉よりかへりし後は、ひときは、快く見えたりつれども、持病、再びおこりて、それよりたゞ牀にのみうちふし、年月をふるほどに、おのづから氣短くなりて、心にかなはぬ時は、いさゝかの事にも怒りふづくみ、むつかしけれども、夫婦の者、少しも、これを、つらしとおもはで、夜ふくるまで、久次は艸履藁沓をつくり、しもは、糸引、麻うみつゝ、側はさらず、病人をいたはりけり。朝食ゆふけの食事の時も、唾、鼻汁などのしづく、交れるこぼれ飯、またはきたなき牀におちたる肴などのやうのものをも、夫婦拾ひとりて、快くこれを食ひ、また、母、常に、赤飯をこのみしかど、近隣に貧餓などありて、おくり來れるを、握飯にして進むれども、過半は喰ひのこして、母の穢き手にもた

るを、志も、さらに、いとへる面色なく、その手の内をなめ清めつゝ、その間にも、手をさすり、胸を撫、介抱するを、病人いと快くおもへり。これらのしわざ、側らより見ては、其の臭穢、堪へがたきこゝちすれど、久次夫婦は、更に、いとへるさまをもせざりけり。然るに、その後、母、いよ／＼衰へて、兩便をも寢間ながらしければ、臭穢、これまでよりも甚しく、虱、多く生じて、よりそひ難く、日ごとに、洗濯をせんとすれども、着替さすべき衣とてもなければ、夫婦の者、裸になりて、おのが着物を、洗濯ものゝ乾くまで、母に着せけり。母も目こそ見えね。その事志らぬにはあらねど、これを心ぐるしくおもふさまなるをみて、夫婦は、子供の衣を、下に着、ふる單物を上に着て、洗濯のたびごとに、着替の衣も、かくの如く、あるさまを、母に志らせて、歡ばせたりけり。また、久次が姉に、さんといふ女あり。花澤村の、三治郎といふ者の妻なり。此の三治郎、田畠ももたらぬ者にて、子供はおほし。年を逐て貧しくなれるうちに、慶應四年のことにや、また、子をうみたりしが、產後の惱みに死にけり。然るに、三治郎も、そのあくるとしの二月頃より、煩ひつきて、母なき小兒を、男の養ふは、健かにそだてがたきわざなるを、まして、貧

と病ひと計會したる三治郎がひとりの手して、いかでかあまたの子を育てん。餓死を見るより外なきを、一族のもの、同僚の者、かたらひて、はじめは助けあひて、取續がせたりけれど、三治郎が病とみに愈べくもあらねど、病人を始め、あまたの子供を、うからやからに預けて、家内分散せんと一决ぜり。この時、四年にうまれし幼兒をも、久次かたに引とり、養育しくれよと、親類同僚、いひつけたるに、久次、母の、かねて、花澤村の孫の行末を、おもひ悩むことを察しをれど、さらに、否びず、やがて、つれ歸りけり。をりしも、久次の妻も懷胎にて、臨月ちかけれバ、立居さへ、むつかしけれど、姑の愛孫なるゆゑ、その心を思ひやりて、少しも厭はず、實子をひたすが如く、取扱ひ、おのれ懷胎の身なれども、晝よるそこかしこに抱きゆき、乳をもらひて養ふを、母いたく歡びて、夫婦の者を、陰よりふし拜みたりとぞ。然るに、その年も暮ちかくなりて、嚴寒にや犯されけん、母の容體いよ〳〵あしく、つひにみまかりけり。生前長き歳月を、夫婦怠らず看護せしことゝも、中中筆にも盡し難く、たゞ、母の病氣の介抱のみならず、その愛孫をさへ養ひて、母をして、心安く目を瞑せしは、類ひまれなる者なりけり。

家政

看護法捷徑（三十一）

三笠舍主人

第四編　常に多き病の心得方（つゞき）

（三）歯病

一　歯病も、亦、數多し、其中にて、通常多きものは、齲歯、歯痛、及歯根膿潰、の三種とす。

二　齲歯は、其人の生れ附きに因るもの也と雖、亦、飲食、其外歯の養生を怠り、或は、其宜しきを得ぬが爲に、起る事多し。猥りに硬き物を咬み破り、又は、熱物と冷物とを、互に飲食し、又は口内の掃除宜しからずして、食滓の歯根等に、積滯するが如きは、皆齲歯、又は歯の損傷を誘ひ起すの、因となる也。

三　其外、常に歯の攝養、宜しからず、淸潔にする事を怠る時は、假令、齲歯を誘ひ起すに至らざるも、多くハ歯石を生じて、歯根緩るみ、遂には咀嚼の用に堪へ

ざるに至る事、間々あり。

四 故に、上の二項に記するが如き事を避ると共に、飲食の後には、其都度、必ず清水を含みて、能く口中を洗ひ、木製の小なる楊枝にて、歯間に嵌りゐる食渣を掃除し、次に歯刷子にて、歯の内外面を摩擦して、歯石の堆積を防ぐべし。

五 歯痛は、齲歯に起る事有、或は未だ齲歯とならぬものゝ、起る事有、歯痛を發したる時は、微温湯、又、「カミルレ」浸にて、口内を清浄とし、又、屢々之を含嗽し兼て、頬に芥子油を擦入し、綿にて、其上を被ひ、又は、耳後に、芥子泥を貼するを良とす。

齲歯に仍りて興るものは、先づ、口内を能く洗ひ、小さき綿の塊を作りて、齲歯の孔内を、十分清く刷ひ、更に、二十倍の石炭酸水、(水百分、石炭酸五分、)を浸したる綿球にて、孔を塡めて後、前の方を行ふべし。

六 齲歯漸々侵蝕せられて、歯根に及ぶ時は、終に顎骨(歯生へ居る骨)をも侵して、齦肉の内に膿を醸し、遂に頬、若くは顋下に、小孔を生し、茲より絶へず、膿液を漏すに至る事有、此症に在りては、絶えず、微温湯、又は「カミルレ」浸の、含嗽を怠

るべからず。

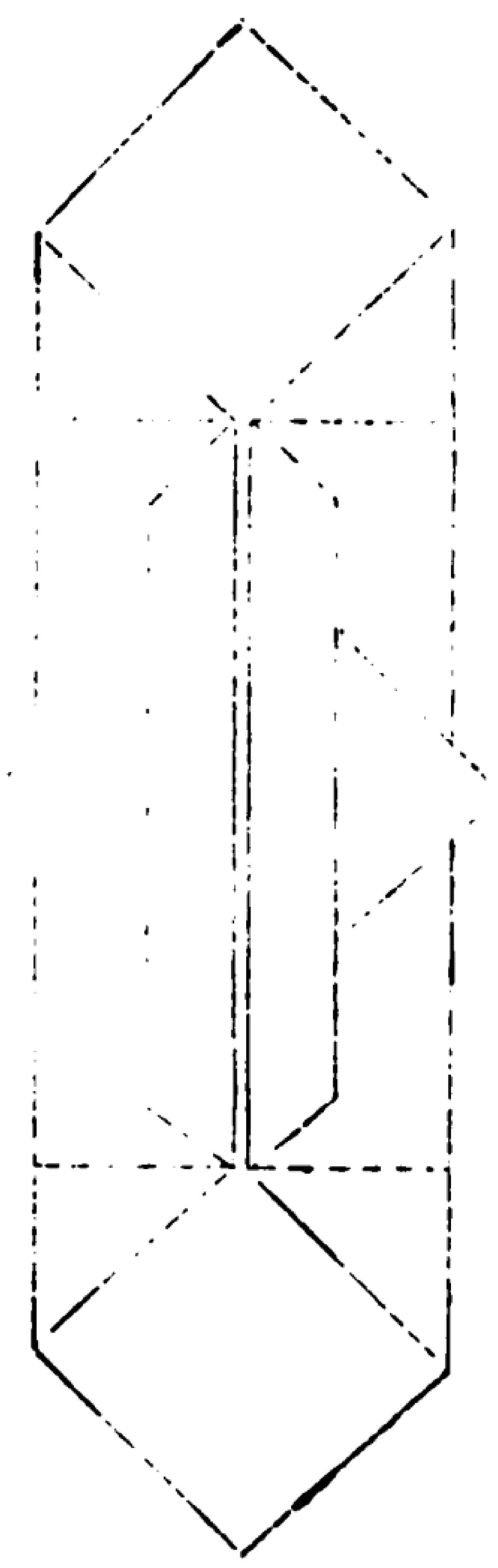
七齲齒、齒痛、等に於て、右に揭る諸法を行ふ時は、多くは一時、苦痛を緩解するも、中には、著るく痛を緩解せざるもの有、いづれにしても、此等の處置を爲して後、專門の醫に乞ふて、其處置を受くべし。

折形（八）

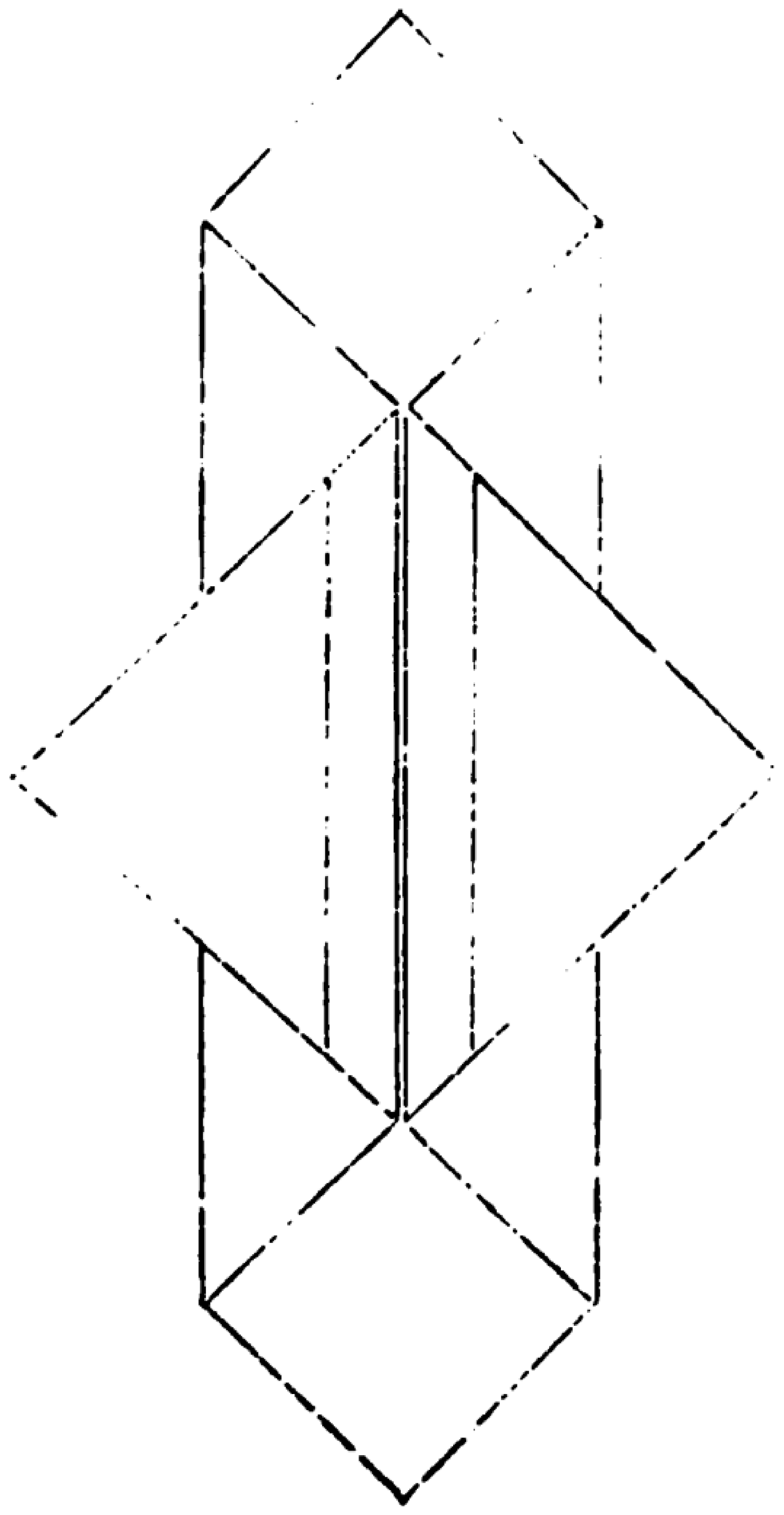
有住齋

一式紙包不書式紙、有書式紙、眞式紙、
水引、上書ともなし、

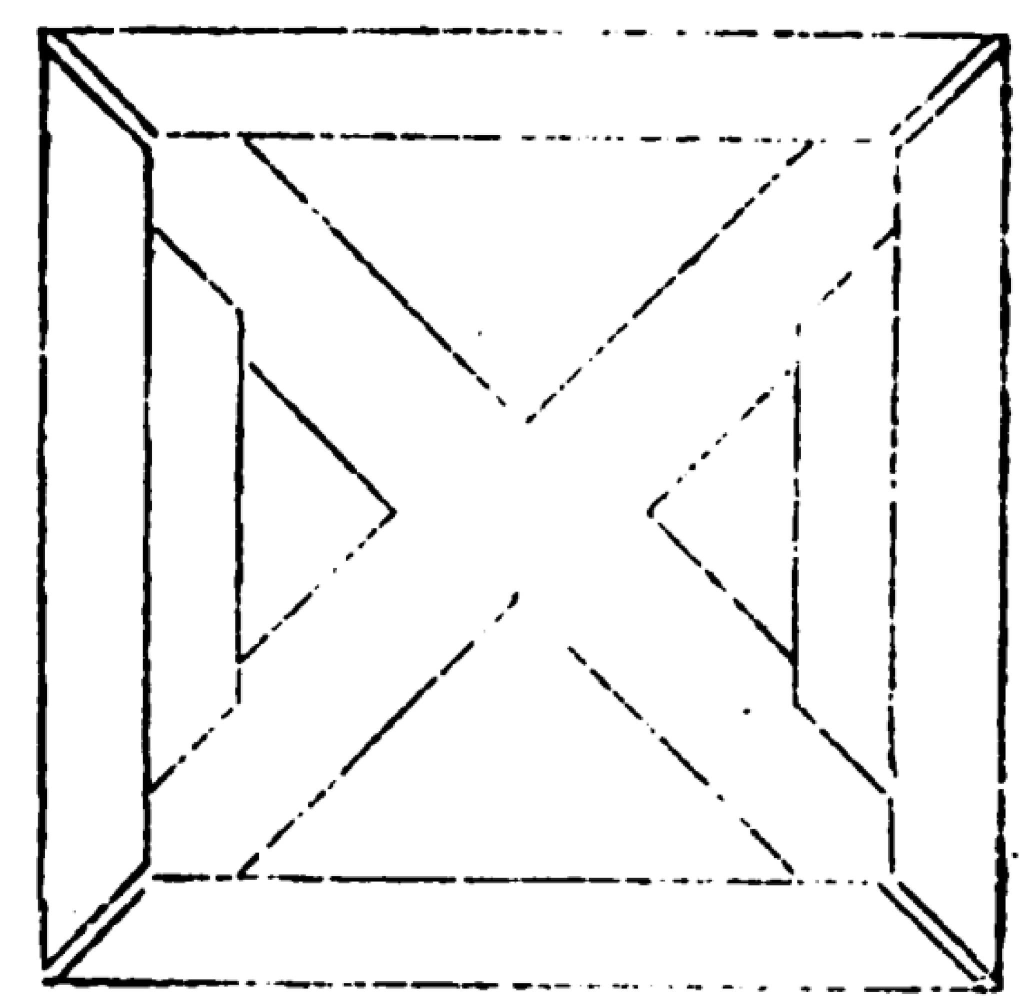
色紙包



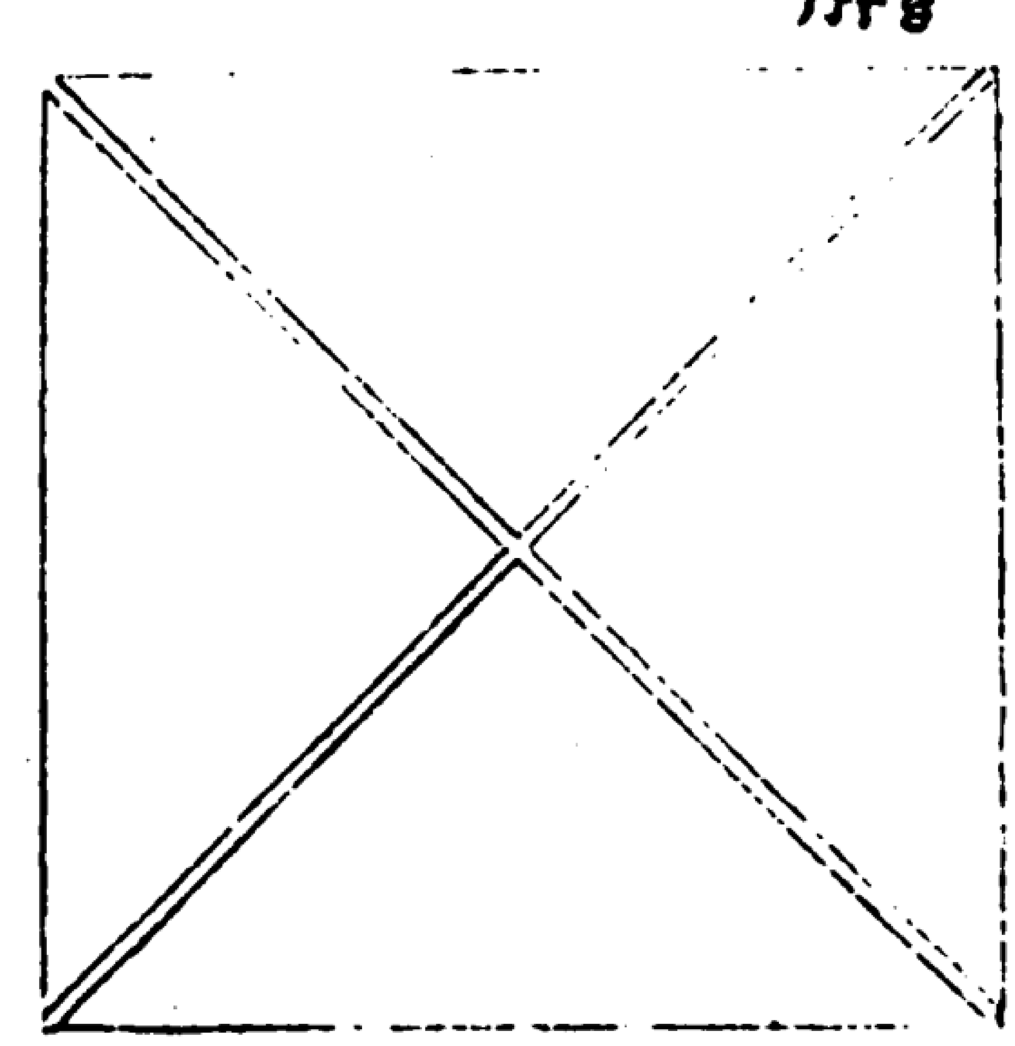
解



有書式紙

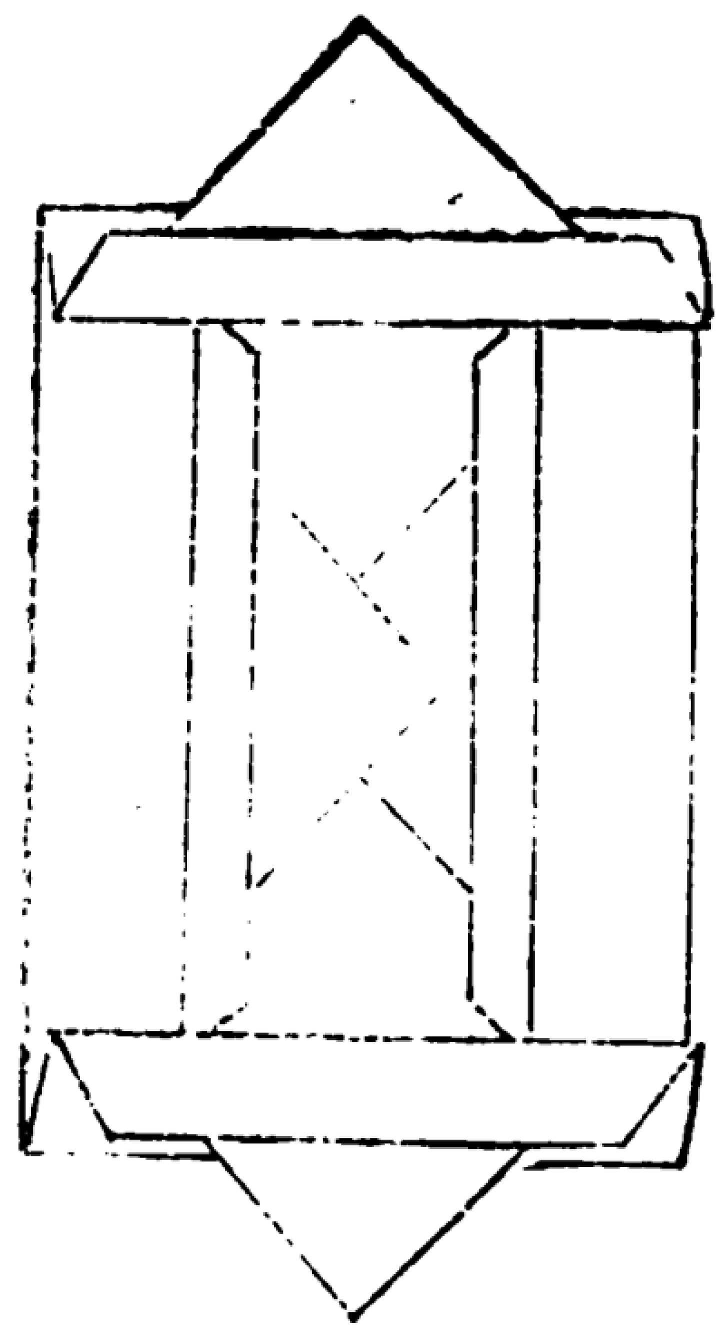


解

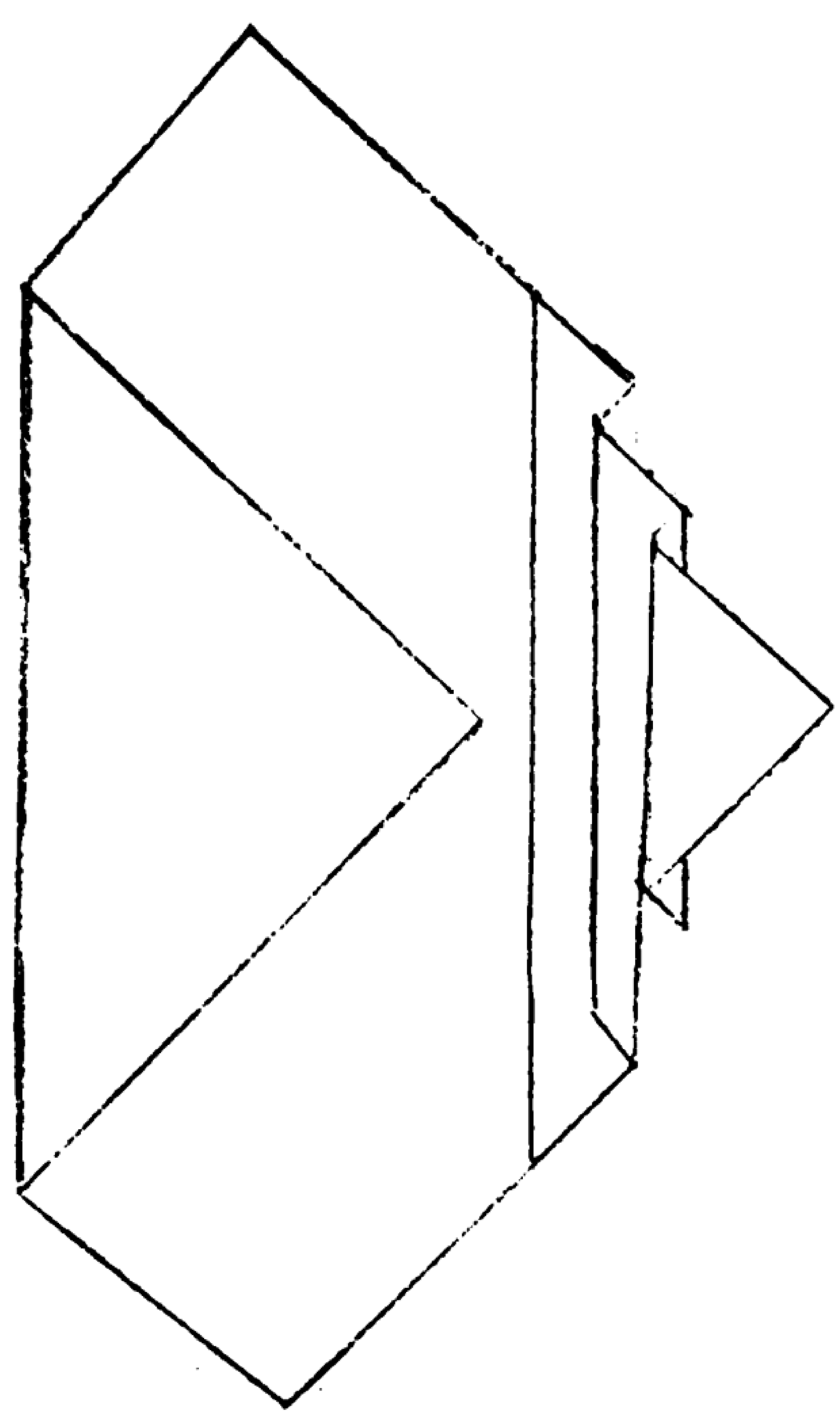


一

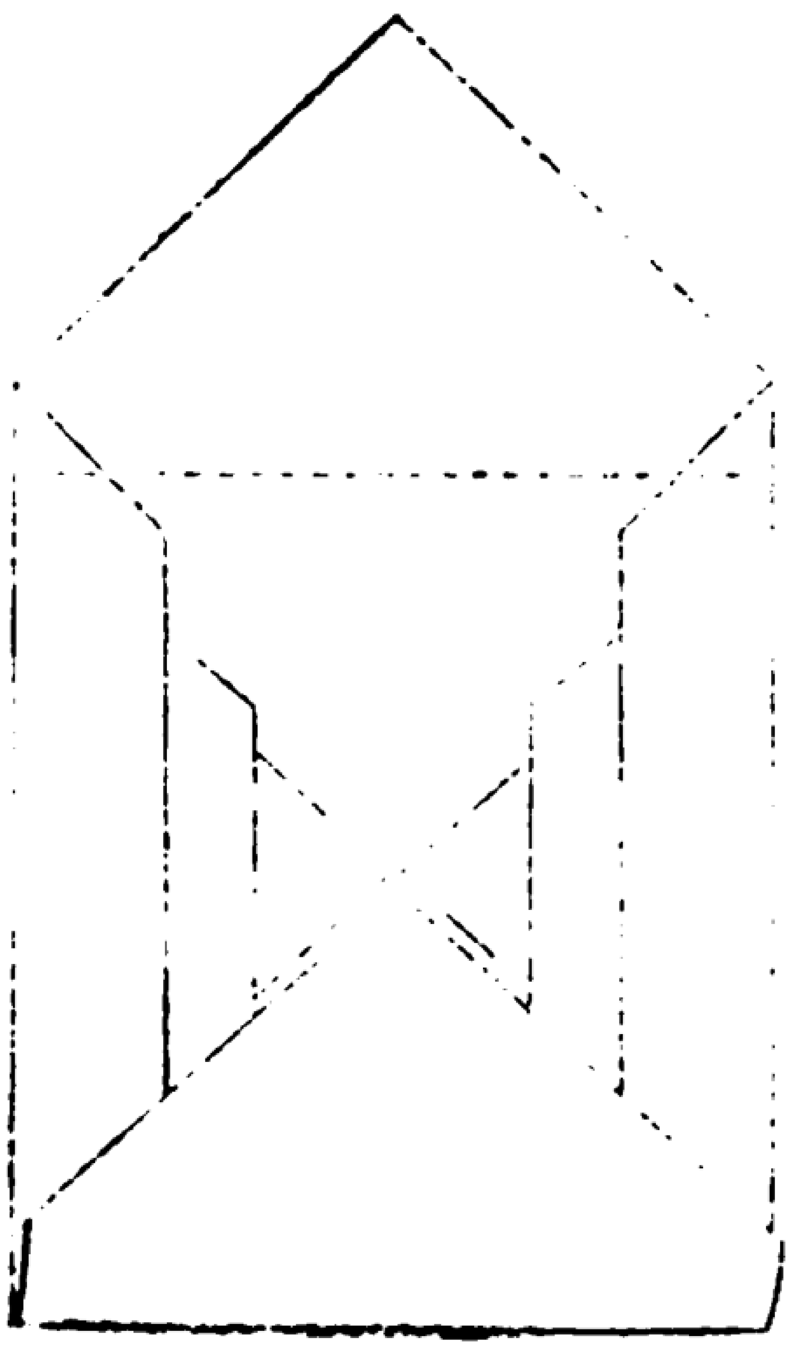
眞式紙



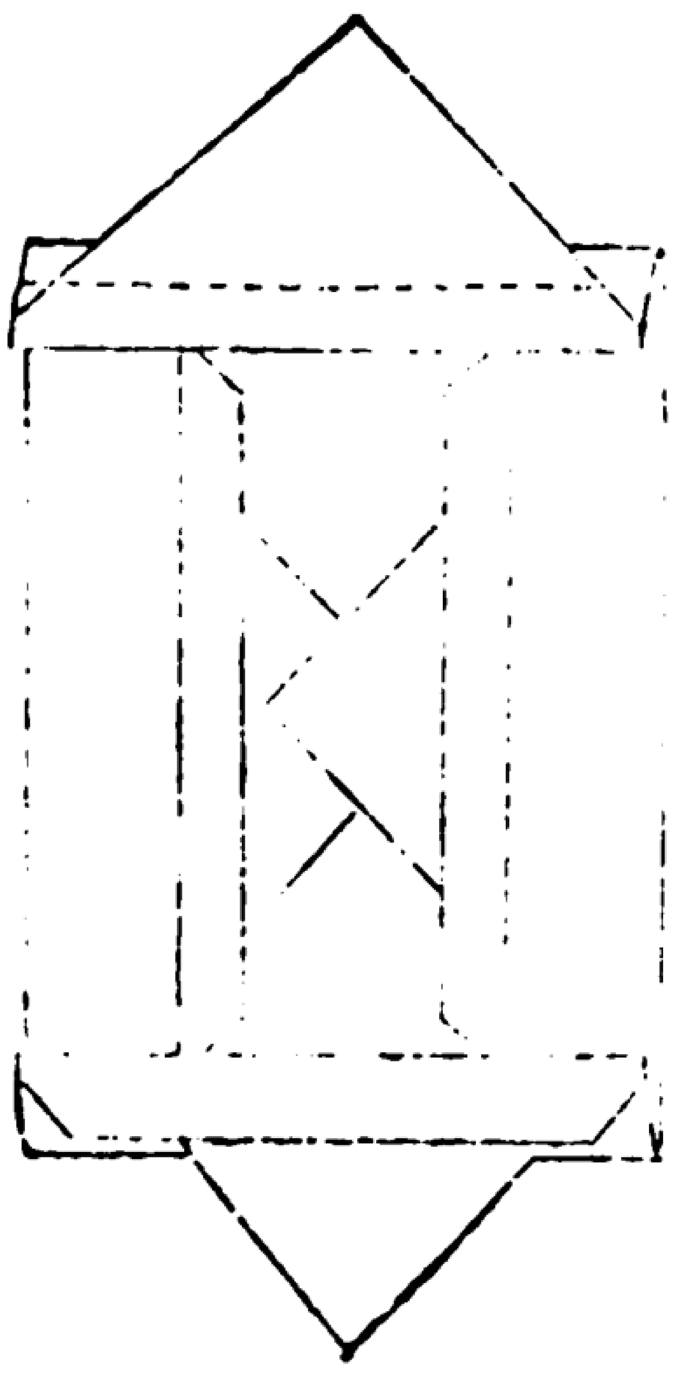
解



二



三



學園

十六夜日記講義（三）

月池閑人

（三）をしからぬ身ひとつは、やすくおもひすつれども、子をおもふ心のやみは、なほしのびがたく、みちをかへりみるうらみは、やらんかたなく、さても、あづまのかゞみにうつさば、くもらぬかげもやあらはるゝと。と、せめて、おもひあまりて、よろづのはゞかりをわすれ、身を、えうなき

ものになしはてゝ、ゆくりもなく、いざよふ月にさそはれいでなん。とぞ、おもひなりぬる。

此段も、前段のつゞきにて、更に鎌倉の幕府に訴へんと思ひつきたることゝ、又、其爲に、都を出でゝ鎌倉に下らんと、心を定めし由をいへり。

◉をしからぬ身ひとつ。をしくあらぬ身体一つ。如何になり行くともかまはぬ人ひとり。即ち阿佛尼自身の事。前にかずならぬ身一つなりけりとあるに、同じいひざまなり。◉おもひすつれども。世の事をすてる。世間の事にはかまはず尼になりて佛に事ふるなり。◉子をおもふ云々。藤原兼輔の歌に「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまよひぬるかな」とあるをとりてかけるなり。子供の爲に、親が深く心配するをいへるなり。◉なほ。やはり。◉しのびがたく。がまんができぬ。◉みち。歌の道なり。◉やらんかたなく。思ひをはらすことができぬ。◉あづまのかめのかがみに云々。鎌倉の幕府の裁判をうくること。例の詞をかへていへるなり。かめ、いにしへ龜の甲を灼きて、うらなふことあり。かゞみはものの美しきもみにくきも

其まゝうつるものなり。故に手本とすべきことを龜鑑といふ。即ちこの龜鑑の二字をよみて、かめのかゞみとはいひしなり。◉くもらぬかげ云々。かゞみに物のわりのまゝにうつるが如く、かの領地の爭論を依怙ひいきなく正しく裁判せらるゝかと思ひしなり。◉かげもや。のや°はうたがひのてにをは。◉わらはるゝと。と°の下思ひてといふ詞をそへて心得べし。◉せめて。甚しく。◉はゞかり。おそれつゝしむべきこと。◉えうなきもの。益無きもの。◉ゆくりもなく。おもひがけず。◉いざよふ月。いざよふとはためらふこと。月にいふは、出んとしてしばしいでざるをいひ又入らんとして、なほしばしあるさまをいふ。普通大陰暦十六日の月にいへり。こゝなるは十月十六日なり。◉さそはれ。いざなはれ。

大意。阿佛自身一人は、世を捨てもすべけれど、領地も入用はなし。併ながら、子供の身の上を思へど、さやうにも致しがたし。又、我國開けてより此かた傳はれる歌の道、これを我家に數代うけ來れることを思へど、彌安心は致しがたし。猶此上にも、鎌倉に行きて裁判を受けしならど、夫爲家の讓狀の通り、正しく判決を下さるゝがわりもせんかと思はるゝ。此領地の事を深く心配する爲に、他の事を忘れ、又

自の身の上の事をもかへりみず、鎌倉に下らんことを決心したるなり。
最初より、こゝに至るまでの三段は、阿佛尼が、鎌倉に下らんと定めしまでの由來をかけり。爲氏卿の不孝なること、爲家卿の讓狀のむだになりしこと。また世の人にすてられたることを述べ。一轉して、歌の由來、歌の事よつきて、其家の格別の由緒あることをいひ、再び始にかへりて、領地を奪はれしが爲に、其格別の由緒ある家も斷絶せんとするよしをいひ、さて此段に至りて子の爲、歌の道の爲に、鎌倉に訴へて、領地をとりかへさんと決心せし趣をいへるなり。詞をうるはしくして、其事がらをあらはにいはざる故、心してよむべきなり。

(四) さりとて、ふんやのやすひでが、さそふにもあらず。すむべき國もとむるにもあらず。

この一段、前段の餘波なり。文屋康秀、ある時、三河の國司の屬官になりて、下りしことあり。其時小野小町にも、共に下らずやとていざなひしことあり。これは其故事をいへるなり。「わびぬれば身を浮草のねをたえて、さそふ水あらばいなんとぞ

おもふ」。といふ歌は、其時小町がよめるなり。すむべき國云々。これは伊勢物語にみえし在原業平のことなり。其物語にいふ、「むかし男ありけり。京やすみうかりけん。東の方に行て、住所もとむとて、友とする人ひとりふたりして行けり。云々、」

（五）ころは、みふゆたつはじめの、さだめなきそらなれば、ふりみ、ふらずみ、時雨もたえず、あらしにきほふこのはさへ、なみだとともにみだれちりつゝ、ことにふれて、心ぼそくかなしけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとても、とゞまるべきにもあらで、なにとなくいそぎたちぬ。

●みふゆ。みは添へていふ詞、ふかき意味なし。只冬といふに同じ。み山、み空、み吉野などいふが如し。◉はじめ。大陽暦にては十一月、十二月、幷に翌年の一月を冬とすれど、大陰暦にては十月、十一月、十二月を冬とす、故にかくいへり。◉さだめなき。天氣が、定まりなきなり。◉ふりみ、ふらずみ。或は時雨が降り、或は降らずして。後撰集「神無月、ふりみ、ふらずみ定なき時雨ぞ冬のはじめなりける。」●

きはふ。きそふ。●木の葉さへ。さへはあるが上に、なほ添ひ加はるをいふてにをは。雨風をやみなくていと心細きに、雷さへなりたれど、などある類なり。こゝにては、時雨のふる上になほ、木葉までが散るをいへるなり。●ことにふれて。見聞く事々につきて、●人やりならぬ云々。人やりは、人の遣るなり。他人にいひつけられて行くことなり。人やりにあらぬは、即ち自身の用にて行くとなり。●いきうし。行くことが、つらい。

大意。東へ下らんと定めし時は、冬の始なり。時雨がふりもしたり、やみもしたりし、又嵐がふき、其嵐ときそひあひて、木葉までが、我が涙と共に亂れ散る。見聞く物事につきて、さびしく、かなし。されど、人に云ひ付けられて行く道にあらざれど、行く事がつらいとても、止まる事も出來ぬ。故に急ぎて、出立すとなり。三段の終に於て、決心せしよしをいひ、こゝに至りて、出立の事をいへり。次の段には、また、爲相等と別るゝさまを述べたり。いとあはれなるところなり。今の如く便利もなかりし世に、婦人の身にして、幼き子を殘して、遙々旅にいでたちし、其情おもひやるべし。

漫録

沖縄縣下旅行日記

まに〳〵庵主人

廿四日　わが來し路傍に古戰塲ありと聞き、立ち戻らむもねたかれど、さりとて、見ざらむも口惜しかるべけれバど、朝疾く起きてその地にゆく、龕地原とて、北谷、間切、平安山村のうちてなり、曇りたれど、野國井もゆかしからず、道のほども、ありしまゝなれバ、足もとまらず、まむしが中に着きぬ。內地の軍兵押し寄せたりし時、首里兵、運天港にて之を防ぎ却け、凱歌をうたひて、歸り來りし途すがら、日も沒ちたれど、一夜をこの地にて明かすことゝ定めき。內地の兵も、思ひしよりは弱きものよ、この體、少しの疲勞だに覺えぬぞかし。今宵の中に、首里まで、行かまほしかれど、大將の按司の定め給ひたること、いひても詮なからむ、今宵一夜は樂しみ明かさむぞと、草鞋も解きあへぬに、はや、皆、酒飲み、三味彈き歌うたふ、仆るゝものあり、喚び起しありくものあり、起さむ起じと爭ひたる末が、やがて、諸共に寐入るもありけり。大將の按司も、妻とゝもに、この席に打ち雜り、萬うちわすれて、遊樂びあへりに、巖かどもくだくむかりの鯨波の聲、その頃、

南の方の野原は、皆、海なりき。ふためきて、出で、見れど、内地の部將一人は、舟より下り、こなたをさして、よぢ上れり誰か如何にして、投げたりけむ、岩片にて血しほと共に、轉ばし落しつれど、事ともせずに、月の光にかけ合る敵はうちつゞけり。味方のものは、大方目もくらみはてたるものどもなり。遂に、やみ〳〵と、皆、殺されにけりとは、この地よついて傳へられたる口碑なり。見れバ、小高き丘の頂上は、竈の如く、大岩にて立てるなりけり、南西の方の岩根に洞穴あり、入口に骨十本ぞかり、薪などの束ねたらむやうにてあり。これは、按司の門番の骨なりと、古より、確に、門番のなりと云ひ傳へたりといふ。洞の奧に二つの髑髏あり、一は按司のにて、少し小さきが、その妻のなりと、洞をいでゝ、東の方にまわれど、穴めかしきところに一つあり、これ即ち、先登せし内地人の骨なりとぞ。うちだしに、ヤマトンチユのといはれては、萬わすれて、頭下げらるゝにを口惜しけれ。ナイチノ人のといはバ、かかる粗忽もすまじきを。さて、この傍の、岩のわれ間をよぢ上ること四五間、洞ともいひつべきところに、三四分バかり虧けたる月の、朝日にあひて、光失ひたるやうなるが、三十餘あり。これ、酒にうちみをとゞめたる盃のなりとぞ。石垣のくづれ、瓶の破片などを見れど、疑もなき古の墓なりと思はるれど。歸り着きて、やがて、雨降りそひ。番所の前は、喜名原とて廣き原なり、そのはての方に、大小二つの松林あり、二つの間の眞中

ともおぼしきところには、年老りたる松の一本、さすがに、枝のあまりこちたくはあらぬが立てり、そぼろ降る雨にて、かくされたるに、華やかなる夕日の光にあひて、ほのかに見えわたり、和やかなる風にも、亂れあへる雨の絲さへ、近きはしるく見えわかたるゝ景色、唯、いみじき畫など見たらむやうなり。

廿五日　讀谷山をたちいづ。半里餘ゆけど、國頭地方なり。道のけしき、同じさまなれど、國頭と聞きては、心も異になりぬ。山田村に至る。村に連れる小山を山田城といふ。例の護佐丸の最初に築きしものなりといふ。今はあとかたもなく、唯、石の祠のみ、はかなげに建てられたり。康熙の末つかたまでは、讀谷山、間切に屬せりといふ、乾隆の頃の文書には、古讀谷山村とあり。昔は讀谷山城などやいひけむ。岩坂を越え、磯邊をつたふこと、一里ばかりにして、仲泊村に出づ。村中の道の傍に、二三十坪の草原あり、そこに村人五十人ばかり、車坐になりて居たり。上坐にや、蓆一枚布き、三人少しよろしき衣着たるが、いと嚴しげにして在り。例の、手洗盥の緣を、少し殘して切りたらむやうの茶盆に、茶碗と土瓶とを載せてすゑおく。後の方の松ヶ枝より、吊り下げられたる鍋の下には、生枝枯葉燻にもえいぶれり。夜など出で合はゞ、山賊などゝ思ひ誤るべきさまなり。後にて聞けど、村の吟味（相談會）なりと。村を出づれば、又、砂濱あり。三四町の波の外に、地どんぐわ瀬、外とんぐは瀨とて、二の岩山あり。こ

の間に泊れる、山原船二艘、體はかられて、帆柱むかり高く見ゑたる、いとおかとし。この邊りよ出會ふ男女、大方、恐しげに、畏まりて禮をす、何たることぞ。前兼久村にては、草鞋を買ふ。一足の價、六百五十文、これ、決して不廉にあらず、驚き給ふな、錢の數へかたの内地とかはたれるなり即ち、内地の十文(一厘)を五十と數ふるなり。二百文を一貫といひ、以上は、皆、十百千萬の數によりて數ふ。一足の價、曰はく、百三十文(一錢三厘)草鞋不足の地にて、猶、普通の價にて商ふ。この村には、涼珠かけたるもの多かり。七十餘の老婆さへかけたりき。又、陶製の五色のをかけたるもありき。谷茶村の村屋にゆき、晝飯を乞ふ、三錢出したれど、芋二十バかりと、一寸ほどの小魚二三十おこせぬ。芋、宜野灣、讀谷山に比して甘味少し。さて、魚はと試しに、生きたるを、やがて鹽に漬けたるにやあらむ、生ぐさくして、食はるべきものにあらず。漁人めかしき男、旦那、名護までくり舟にめしては如何、など、すゝめよ來りしこそ、おかしかりしか。恩納、番所より、五六町こなたあかさき原の前の淺洲に、例の岩山十むかりあり、中にて大なるを、ながしま瀬といひ、この次なるをば、おかみといふのみにて、おしすべたる名もあらぬよし、小松のしげりたるなどありて、そのけしき、いはむかたなし。

唯あゝといひし昔のおもいづる

いそちかくたてるコマツ島山

小松島ともつけよかし。六時すぎ、番所につく。

今夜も、蚊帳なし、屋良にて覺ゆれど、苦しともおもはず。

道のしをり歌あはせ（五）

久志本常幸寄贈

おのづから花の折のみとふひとの
　こゝろの色をいかゞたのまん

春ならぬ折にもひとをとひしかバ
　花ゆゑとのみおもひしもせじ

はじめのうたは、俗よいへる、えりにつく輕薄」をいましめたる歟、後のうたは、親戚、朋友のあはひなど、日ごろ疎〳〵しくすぐして、用ある時のみを、たづね、」とか、諺にいへるのいましめになん。

色見えでうつろふものは世の中の
　ひとの心のはなにぞありける

ちゞの色に移ふらめどもしらなくに
　こゝろしあきの紅葉ならねバ

たがひに、人のまじはりは、幾久くちぎりをかへず、ふるきなじみほど、いとゞまめやかに、むつまじむべきものなるに、「花にそめ紅葉にそめてまことなき人の心のあだし世の中、」あさましかりけるならはしなり。

春くれど空にみだるゝいとゆふを
　ひとすぢにやはありと頼まん

言の葉をたのむべしやは秋くれバ
　いづれか色のかはらざりける

世にあひ、時めく人の、我にこびへつらへると

もがらを、たのもしとおもふは、いとはかなし。

色かはるひとのこゝろの淺茅はら
いつより秋のしもはおくらむ

うつりゆく人のこゝろの秋かせに
言の葉さへもかれはてにけり

人情、炎涼のわびしさ、たのみがたき世のならはし、あさましく悲しきかな。

數しらずしげるみやまの青つゞら
冬のくるにはあらはれにけり

霜がれはひとつ色にぞなりにける
千種に見えし野べには非ずや

よのつねは、かしこくふるまひ、いきほひもうに、のゝしるものおほかめれど、俄に、不慮の事あるきはゝ、見ぐるしくとりみだして、秋の木の葉のちり〴〵になる、人の心のつれなきこそ、いとも〳〵うたてにくけれ。平生の時は、おろかしき人だに、いかやうにも、世の間をあはするものなれど、常ならぬうきふしにおよびて、心まどはざるにあらざれど、さふらひとはいふべからず、さるゆゑに、聖賢を敎をまなびて、心の覺悟をあきらかにし、よく、事變に處するの道を、わきまへ置でやはあるべき。

ひく人もなくて捨つるあづさゆみ
こゝろ強きもかひなかりけれ

をみなへしはなの心のあだなれば
秋にのみこそあひわたりけれ

ものに氣強すぎて、あながちに、理にいひつのりぬれど、我をひく人だにも、あいそうつきて、

厭ひ疎んずるものぞかし。ことわざに理のこうじたるは、非の一倍」と、いへるは、まことにかしこし。柔よく剛を制するのことわり、世をわたる道の至急なり。いはむや、詞の華のみにて心の實なからんものは、いづ方にも、あきうとまれて、世に捨られなん。にくむべし、あはれむべし。

みだれたる名をのみぞたつ苅萱の
　おく白つゆをぬれぎぬにして

ちれどかつ風のおとより聞かへて
　落るともなきはぎのしたつゆ

をうなのさかしくわがまゝにして、しば〳〵、養娘をとりかへ、または、かなたこなたへ、しきりに、かしづきありく、いたづらめのさま、これに似たり、さるを恥かはもせさるはにくし。

さそはるゝ雲のゆきゝの定めなき
　時雨はかぜのこゝろなりけり

風ふけどさそはぬ水に根をたえて
　たゞよはれゆく池のうきくさ

こは、うかれめのさまなるべし。よのつねのをうなに、此たぐひあるは、いかにぞや。

はちす葉のにごりにそまぬ心もて
　なにかは露をたまとあざむく

うき草のひと葉なりとも磯がくれ
　思ひなかけそおきつしらなみ

いみじき人のたましひを持ながら、うるさく慾にけがれて、世をかすめ、物をむさぼり、人ならぬわざしいづるは、あさましといふもさらな

り。財貨にたつさはる役人は、殊に此いましめを、心に銘すべし。

難波がたしげりあへるは君が代に
　あしかる業をせねばなるまじ

小山田にしげる五月のうきくさは
　我こゝろよりたねやまきけん

積善の家には、餘慶あり、積不善の家には、餘殃ありとなん。よきも、あしきも、我行のつとめよあるべきを、たゞに、神にへつらひ、佛にこびて、運をいのり、福をねがふは、かたはらいたきうつけわざならずやも。

しられじなたえず心にかゝるとも
　いはでの山のみねのしらくも

きえねたゞしのぶの山のみねの雲
　かゝるこゝろの跡もなきまで

いづれも戀の歌なり。たゞ、いもせみそかごとのみならず、すべて、人しれず、しのびておもふ事は、おほかたはよからぬわざになん。かゝるまどひの雲の、あとなくなるまでに、きようせよかしと、こひねがひぬるは、己にかちて、禮にかへるありがたき心ざしなんめり。さるを、心におもひたゝずして、口の端にだにいひ出ねば、人にはしられまじとのみおもへるは、いとはかなくおろかなる心なりけらし。

いなぶねの苫ひきおほへもかみ川
　しばしばかりの時雨なりとも

あふことを安濃の嶋にひくあみの
　たびかさならば人しりぬべし

われながら、あしきわざとしりつゝ、これはそ
の事は、くるしかるまじと、かりそめに、一た
びゆるせど、をかすことたびかさなりて、おの
づから、習ひが性となるものぞかし。されど、し
ばしのしぐれにも、ぬれざらまじと、其始をつ
ゝしむは、身をまもる道のおもきいましめなる
に、すまじき事をひそかになして、さいはひに、
人にしられざれど、つひに、なれて、しど／＼
して、わざはひにおちいるたぐひ、世におはか
り。かゝみるべきことになん。

しどしこそはれぬ日数も数へつれ
　ならひになりぬ五月雨のそら

夏草の野はらにふかくなるまゝに
　はる見しみちは跡だにもなし

物にすさびて、よからぬ方にまどひもてゆくこ
と、われしらず、口に／＼常となりて、はては、
あらぬものになるぞかし。ぬれぬ間は、露をも
いとへといふ諺は、かしこし。毒くはゞ、皿ね
ぶれといへるは、いかなるこゝろなるらむ。

池にすむ名ををし鳥の水あさみ
　かくるとすれどあらはれに鳬

かくれなき鳰のかよひぢ今さらに
　浅きこゝろのみづからぞうき

かくれたるより、あきらかなるはなしと、しらざ
るは、いとも／＼、かたはらいたく、つたなき心
かな。

かざせども老はかくさでうめの花
　いとゞかしらの雪と見えつゝ

なき名ぞと人にいふべきわが袖に
　隠れぬものは夜半のうつり香

負をしみするものゝ、手むさく、過をかざりて、うしろめだくまぎらはすさま、いとうたてし。

こゝろみにおもひしものを秋山の
　初もみぢ葉のいろに出にけり

人しれず頼めしことはかしは木の
　もりやしにけん世にふりに鳬

いやしくも、おもひ内にあれは、かならず、外にあらはるゝこと、かげの形にそひ、ひゞきの聲に應ずるかごとく、神ならではと、おもふ事の、いつしか、人にしり透さるゝ、ぞおそるべき。さるに、まさなき道にまどへるともがら、おさましき行して、人にしられじとおもふこそ、はかなけれ。やがて、うき名たちひろごりて、世に恥をさらすは、さだまりたることわりぞかし、つゝしみつゝしむべきの至にこそ。

名取川瀬々のうもれ木あらはれば
　いかにせんとか相見そめけん

世の中はなぞやまとなる見なれ川
　見なれそめずぞ有べかりける

みそか事をしのぶとすれど、あらはれなば、いかにせんと、おもひめぐらして、あひ見そめしを、悔みおそるゝ終を、始に愼むのいましめ、いとかしこし。

人づまにこゝろあやなくかけ橋の
　あやふき道は戀にぞありける

言の葉にかけても何かおもひ出る

いつきの森のしめのしたくさ

かりそめにも、不義の念をきざすまじきいましめ、いたくつゝしみ、かたく守るべし。

唐國のとらふす野べにいるよりも
まどふ戀路のすゑぞあやふき

戀に身をすつるためしもあら熊の
すむてふ山にふみやまよはん

世にまどふべき事のおほかる中に、いもせの道ばかり、わりなきものなし。いたづらの甚しきにいたりては、戀路のやみに走りまどひて、ゆくへもしらず、うかれさまよふぞ、あさましき。おのが名をけがすはいふにたらず、親、兄弟のおもぶせとなるを、おもはざらめや。

心こそゆくへもしらねみわのやま
すぎの木ずゑの夕ぐれのそら

風になびくふじの烟の空にきえて
行へもしらぬわがおもひかな

戀に心のみだれくるへる、かくのごときに至る、あやふきかな。おそるべきかな。

きえねたゞ蜑のすくも火下もえの
けぶりやそれと人もこそとへ

かねてより思ひしことぞふし柴の
こる計りなるなげきせんとは

あるまじき思ひを心にこめながら、世にしられじとかまふるは、たとへば、火をそのまゝにして、たゞに、烟をおほひかくすがごとし。いつしか、人に見あらはされぬことやあらん。いたくいましめ、おもひけして、ふし柴の、こるば

かりなる歎なからんやうに、つゝしむべし。

藻塩草（つゞき）

一若き人はつかひ能く、用事もまをしつけよく、下よりも、主人のわかきは、取入よくて、その身の才覺はたらきより、年寄役人をきらひ、自分のはたらき出たがるものなり。これは、主人のしつけかた、こゝろねあるべき事也。すぐれて、能人は、有がたきものなれど、大躰十人並の人は、主人のつかひやうにて、能もあしくも成もの也。人をつかふには、いかほどなじみかさなるとも、禮をみださず、しだらくにならぬ樣に、つかふべき事肝要也。人々ゑたる事あり、えぬ事あり、そのゑたる所を用ゐ、えざる所ををしへ習はしめ、行儀よく、つかひもてゆけど、大かたの人間にあふもの也。數多くめしつかふうちには、さま〴〵の人心なれど、器用、不器用、しな〴〵ありといへども、人をかたづけつかふ事はあしゝ、然らば、なにゝても、用をつとむるものは、片づきつとめ、つとめぬものは、いつもつとめぬ樣に成もてゆきて、もの事かたより、あしゝ、いづれも、そのつかふべきしなを考へ、ゆきわたりて、めしつかふべし。

いかほど、なじみかさなりたりとも、心安過て、上下禮なく、下よりも、心まゝいづる樣にあるべからず。主人に言葉をかへし、わが勝手にいぶりを出す類ひは、みな心安すぎて、主人をかろしむるより出る事也。ねがひ事、下への申つ

け事なども、しかるべき年寄役人をさし置、わかきものにいたさせ、ぢきにも申つけ、年寄のてをぬきて、申事をきゝ入など、ならはしわしく成行バ、しだいに禮儀みだれて、をさまらぬ様に成もの也。主人の申付る事も、くちがへし、かげ言などするをきゝ、主人も、また、かげ言、そしり、うはさなどして、上下たがひに、ふつやく様の事は、見苦しく、あるまじき事也。何によらず、申つくる品は、きゝつと立やうに、主人の威をうしなふべからず。下々のかげ言は、關白、將軍の御うへをもいふならひなれバ、とり上げきゝ入るゝにたらず。手前にちがひなき様にて、つねにつかひ習はし、をしへいましむべし。尤、つねに、慈悲ふかく、思ひやりわつくして、病

ある時、其身の難儀ある時は、一入こゝろをつけていたはり、あやまちある時は、能くをしへさとして、あらためさせ、かりにも、しうとめ、夫、一もん、はうばい中のわる口、かげ言をいはせず、家風しとやかに、をさめつかふべし。子がひは、一しは、子をそだつるもおなじ心にて、能をしへならはすべし。ぬすみする人、いたづらもの、淫亂深き人、けんくわずき、人の中事、すぐれて、うそつく類は、いつかたにてもわしき人なれど、大かたつかふべからず。其外は、多くは、もの事かんにんつよく、心長く召つかふべし。家風よく治るときは、外にてしたらくなる人も、能なるものなり。すぐれて出頭、または、きらひなど、人別ある様につかふ事は

あしきとなり。

一人にものつかはす事は、よく心を用ふべし。若きときは過不及多きものなり。つねに、ほどよく、末々までも行わたる樣のこゝろえ、肝要也。かくべつに骨を折せ、または、はうびすべき事あらバ、すみやかに遣すべき也。つねには、わが身の分量をかんがへ、前ニ云、衣服、くし、かうがい、その外のことにも、無益のついえなく、或は、着類も、一つに、三兩もいれてこしらへんより、一兩づゝのもの、三つある樣に、心もちたしなみあらバ、めしつかひへ、時折のこゝろづけも、別に求るに及ばず、そくばくの過不及もなくて、ほどよく、成わがるべし。しかれど、何事も、つねに、身にわたくしありては、內外とも、とゝのひがたし。けんやくを用ゐて、おごりなく、なすべき事は、能とゝのふ樣に、そのはじめより、心をもちゐてしかるべし。

一めしつかひのつとめあしく、心ざますぐれざらんは、よくつねにをしへさとし、年寄役に、能異見をいたさせ、成べきたけは、をしへあらためさせて、つかふべし。ちと心にかなはぬ事ありとて、はな〳〵叱追ひ出しなどするは、心みじかきわざなり。大かた、そまつのあやまち、心外のそまつは、かんにん致すべし。

一めしつかひ新參の內は、大かた、能ものとみゆるも、なれては、たがふ事多きもの也。いかにも、言葉を過し、末の約束など、いたす事あるべからず。くどく申すごとく、作法よくつかひ、

奥深く、たのもしく、下よりも、なにとぞ、いつまでも、御陰によらんとおもふ様につかひ成すべし。年寄たる人、かゝるべきかたなき人などには、いつまでも、なさけをかけて、終りを見とゞけてやり、とし月かさねつかひたるものは、それ／＼に、縁付かたつけ、たのもしくあらせ、おのづから、人おもひつくべし。末の約束のみしても、其人あしく成て、つかひとげがたければ、言葉もたがひ、けく、たのもしからぬものに成て、人のおもひ入も、うすし。（つゞく）

妙運智運兩尼の略歴

高橋けい子投

府下、本所新井町の感應寺に、おこなひすます、妙運、智運といへる二人の尼僧あり。年のころは、四十に垂として、殘んの花の香にはやかに、昔床しき風情あるは、いかなる者のなれる果ぞと、心をとゞむる人もあるべし。そも、この妙運尼といへるは、さいつころより、各新聞に、其名あられし、彼の京橋湊町なる舶來船具商今泉うた子が厭世の名なりけり。うた子は、四才にして、其母を失ひ、繼母に事ふる、前後七人、去かるも、もと、孝心深き性なれば、繼母に事ふる、實の母に異ならず。就中、七回目の繼母の、七十有餘年の高齢に至るまで、一度も、其意にそむきしことなかりきと云。又、其容貌、いとうるはしければ、富貴の家より望まれしも、心に思ふよしありとて、かたくいなみて、從がはず、そは他なし。もし、富

有の家に嫁する時は、其繼母に、充分の孝養をつくしがたきを思ひはかりてなりとぞ。十七才の年に、今泉宗兵衛といへる財産もなき、身一人の者に嫁してより、とも〳〵稼ぎ働きて、少しの餘財をつくり、やがて、繼母を引とりて、厚く孝養を盡したり。其後、明治九年の頃、京橋東湊町に、舶來船具の店をひらきぬ、然るに、同じき十二年十二月、不幸にも、火炎にかゝり、夫婦がためには、命とも云べき家屋土藏をはじめとして、商品器具も灰燼となりぬ。商家の常とて、此度は、他より金子を借入て、家屋、幷に、商品も、稍、整頓はせしものから、これが爲に、二千餘圓の負債をなしぬ。然れども、宗兵衛は、もとより、商法に鍛錬せることなれは、さのみとも思はねど、時なるかな、宗兵衛は、其頃よりして、かりそめの病の床に打臥しゝが、次第〳〵に重りゆきて、うた子が、晝夜寢食を忘れ、心をつくす看護にも、定業なるか其甲斐なく、終に、十四年十一月三十六才を一期として、あはれや、黄泉の客となりぬ。歌子がなげきはそれのみか。夫か病中の手當より、野邊の送りをすましゝまでには、入目も多くありしため、今は少しの貯へも、つき果たりし折もをり、人のこゝろの頼みなく、宗兵衛死せりときくよりも、債主は、忽ち、うた子にせまりて、宗兵衛殿をこそ見込て借しつれ、おん身は女の事なれは、此後、商法もなるまじきに、いかで、家藏を借財の代となし、御身は、なほ、年も若きに、何方へなりと嫁るか。はた、働ある人を聟とするか。

いづれか、方を付らるべしなど、かなた此方より、せまりくるに、老母は何事もわきまへず、只管、歌子を便りとして、一日もはやく、再縁をもとめ、歌子が相談相手にもと、右左より、せがまるゝに、歌子つら〱思ふ樣、我は生得不幸にして、幼き時に、親に別れ、今、また、偕老の夫を失ふ、かゝる憂き目にあふことは、もとこれ、宿世の業因ならんを、なんぞ、再び、夫を持て、罪に罪を重ねんや。いかにもなして、亡夫を志を受繼て、再び、今泉の家を興し、負債方を濟さんものと、それより、毎夜二時と云に、漆町の家を出、芝公園の毘沙門堂へ、はだし參りをなすこと、滿三年、其時に、三つの願を發して、祈誓をこめたり、其誓願書に曰く、

敬て言す。阿彌陀如來、毘沙門天王、慈悲證知し給へ、妾、今泉の家を興さんために、三の誓を立、三の願を發す、一には、生涯、貞女の道を守り、他の男子に身を汚さず。二には、生涯、日課念佛、六萬遍づゝ相續せむ。三には、毎月日曜と、每年寒三十日の間、芝公園內、毘沙門天へ參詣せん。此功德を以て、三の願を成滿し給へ。一には、今泉家再興せん。二には、生涯、財法廣施して、一切の人々に彌陀佛の名號をすすめ、一切女人の龜鑑とならん。三には、生涯、障なく、日課念佛を相續して、臨終正念に、極樂往生なさしめ給へ。若、この誓約に背く時は、即罰をうけ、今生には、大禍と難病とをうけて、諸人に恥をさらし、來世には、八萬地獄

へ落ん事を、手印血判し、誓願し奉る、證如件

明治十四年十一月廿五日

今泉うた血判

廿八才

阿彌陀如來　前

毘沙門天王　前

一切護法神　前

此願を發してよりは、其精神、さながら金剛の如く、晝は終日、家業に身をゆだね、夜はよもすがら、念佛三昧して、夫と母の靈をなぐさめ、二時を合圖に、家を出て、毘沙門堂へ參詣し、滿三ケ年の間は、絕て臥床に入て、寢に就く事をせざりきとなん。然るに、かく夜毎に、家を忍び出るを、近隣の者、いつしか知りて、わらぬ浮評を立られしも、元より、それらに、心もとめず、一心不亂に、つとめはげみて、滿三年を過る頃には、少しく身代をとりかへしぬ。扨、爰に、最と不可思儀なるは、營業上の掛引進退、其他の秘密を、うた子は、いつも夢想に感じ、十三ケ年間一度も失敗せしことなかりきとなん。こは、敢て怪力亂神を語るにあらず。實に。うた子の身に感じたる實說なれど、うたがはしきものは、親しく歌子に問ひねかし。然して、追々負債も減じ、終に、十ケ年間にして、全く、二千有餘圓の負債を消却したりしは、實に稀なる女丈夫なり。其間に、老母も七十有八にてみまかりしが、これが野邊の送りより、跡跡までも、懇ろにとり行ひて、今は、猶、餘財も幾分か出來にけれど、歌子は、元來身寄少く、其

上、子とてもあらざれば、いかなる者をか、今泉の相續人となすべきと思ひわづらひ居る折しも、歌子三十六歳と云時、重き病の床につき、一日〳〵とおとろへ行て、たのみすくなく見えたりしが、病苦の中に、夢ともなく現とも、あり〳〵と、日頃信ずる彌陀、三尊、併に毘沙門、八幡の五體の尊像あらはれて、歌子に示すところありと覺えて、夢はやぶれしが、それより、頓に、快よく、氣力も元に復せしかバ、歌子は信心肝に銘じ、それより、たけなる頭髮を、日毎に一筋づゝぬきとりて、彼の夢想の五尊像を、その頭髮もてぬひとりするに、一ト針三禮の法を以てす。滿三年の星霜を經て、其ぬひとりの出來せる此時、明治廿六年十一月、宛も、亡夫の十三回忌と、亡母の七回忌に相當するを以て、芝公園紅葉館にて、いと盛んなる法會をいとなみ、親族知巳を、悉く招きて、厚くもてなして、のち、心事歎願書といへる小冊子を、人々に配りしが、これぞ、歌子が、積年の志操を知るに足るものなりし、而して、其書の末に、記して曰く、

獨り、つら〳〵考ふるに、世俗塵事は、一夜の夢に異ならず。昔より貞婦烈女と呼ばれし人の、頓に、此世をすてゝ、發心の尼となられしためしも、あまたありと、かゝる人の後目相續を賴みとする事、絶てこれなき由も承り候得ば、愚なる妾事も、あはれ、此等の芳蹤を去たひ、せめては、その後形なりともまなび度と存候得ば、一先づ閉店して、妾事は、來る明治廿七年一

月十二日、初寅の日を以て、麻布區、麻布笄町繁成寺住職、深山法運師を師僧と頼み、剃髪染衣の身となり、即日、東京小石川、表町輪島聞聲尼の世話を以て、淨土尼衆學校へ入門し、俗事を離れ、ひたすら、後生、淨土の道をまなび、卒業の上は、若し、因緣もあらバ、たとへ小堂たりとも、今泉庵を新建して、永く、三寶へ御供養申上、併て、亡母亡夫の菩提を祈り、一家親類有緣無緣の追善相營み度誠心に御座候、云々

明れバ、明治廿七年一月十二日、これまで、貯へたりし衣服、調度は、悉皆、遺物として、親しき人々に分配し、身には一物も留めずして、彼の歎願書にいへる如く、終に剃髪して、世塵を避けたり。

編者曰はく、此記事、いかにぞや覺ゆれど、其貞操と、勤勉、家を興したりしとを取りしなり。

太宰純の俗樂論

太宰純は、延享頃の儒者にて、この論は、その著駿臺雜話にのせたれバ、世にありふれたるものなれど、俗樂の弊をあげらひて餘すところなけれど、今更のやうにものしつ。

今の世、淫聲多き中に、絲竹の類には三線、謡ふ物には、淨瑠璃に過ぐる淫聲なし、三線は、琉球國の樂器なるを、慶長の頃とやらん、此の國に傳へしといふ、昔、晉の阮咸が作りし樂器を、阮咸と云ふ、此の國に傳はりて、昔は玩びたるにや、延喜式に載せたり、今の三線は、阮咸の遺制なりと云ふは、いかゞ有らん、玩咸は、如何なる制に

てか有りけむ、今の三線は、甚しき淫聲なり、其の作、琵琶に似たるやうにて、琵琶に比ぶれど、形、甚いやしく、これを彈ずるやうも、極めて見苦しく、其の聲、僅に發すれど、俄に、人の淫心を引起して、放辟邪侈に至らしむ、其の害言ふばかりなし、士君子の、かりそめにも聞くものにあらず、淨瑠璃といふものも、三線と同じ比に始れりと聞ゆ、小野氏の女、三河國矢作の宿の長者の女淨瑠璃といひし者の事を、十二段の昔物語に作れりしを、其の比の目くら法師、之に節をつけて語り出しゝとかや。後の人、之に倣ひて、色色の昔物語を、彼の體に作りて玩ぶ、本淨瑠璃と云ふ、三線の、これによく叶ふ故に、淨瑠璃に、必、三線を合せて、世俗の、上なき玩となれり、

然るに、寛文、延寶の比までの淨瑠璃は、皆、物語を演せし故に、詞やさしく綴成して、あはれにをかしき事も多かり、淫聲と言ひながら、忠臣、孝子、義士、節婦の事を言へれど、愚なる小人女子も、是を聞きては感じあへり、元祿の比より、稍、益、俗に近くなりて、淫靡の聲多し、寶永の比、京の淨瑠璃師、江戸に來て、鄙俚猥褻なる淨瑠璃を唱へしより、江戸の人、これを面白き事と思ひもて興じけるに、享保の初に、又、難波の淨瑠璃師來て、彼方なる俗調を弘めし程に、江戸の人、彌、これを好みて、江戸の古き淨瑠璃を棄てゝ、ひたすらに、京、難波の淨瑠瑠を習ふ、賤者のみにあらず、士大夫諸侯までも、之を好みて、一節を學ぶ人有り、こゝに至りて、昔物語をすてゝ、

只今の世の賤者の淫弄せし事を語る、其の詞の鄙俚猥褻なる事、言ふばかり無し、士大夫の聞く可き事にあらざるは、いふに及ばず、親子兄弟なみ居る處よでは、面を背け、耳を覆ふべき事なり。（中略）三線も、寛文、延寶の比までは、調子もひきく、彈く手もまばらにて、筑紫琴に類せり、謠ふ歌も、調やさしく、節もゆるやかにて、俗調と言ひながら、いやしげ少かりき、近き比は、調子高く、彈く手も、甚せわしく細やかになり、謠ふうたも、詞いやしく、拍手つまりて、いそがはしさ言ふ計なし、淫聲の至極、人心を害ふ事、これより過ぐる物なし、凡、雅樂の拍子は間遠にて、絲竹共に、手を使ふ事まばらなり、雅樂とは、正樂をいふ、淫樂は、煩手とて、手を繁くす、今の三線、牧笛、尺八、一節斷、皆、煩手なり、中にも、三線の煩手に比ぶ可き物なし、箏は、雅樂の器なるが、筑紫箏になりて、俗樂に落ちぬれども、其の聲、本雅樂なる故よ、いたく、人の心を蕩さず、今の人、雅樂を學ぶ事能はずとも、せめて、筑紫箏を玩ばゞ、猶少しよかるべし、牧笛、尺八、一節斷は、俗樂にて、煩手なれども、三線の如く、淫聲にあらず、（中略）孝經に、「風をうつし、俗を易ふるは、樂より善きは無し、」と云へり、惡しき風俗を移し易へて善くするは、雅樂の功なり、善き風を移し易へて惡しくするは、淫樂の力也、雅樂にて、風俗を善くするは、其の效遲く、淫樂にて、風俗をあしくするは、其の效早し。されど、たとひ、雅樂、世に行はれても、淫樂を禁せざれば、雅樂廢れ易し、

孔子の「鄭聲を放て、」とのたまひしは、是の故也、今の世には、雅樂たえて無くして、淫樂のみ盛なる故に、士民の風俗、年を追ひて惡しくなり下る事、走る馬の嶮しき坂を下るが如し、貞享より、元祿の初までの人の風俗、思出して、今の人の有樣を見れば、衣冠せる人の側にて、赤裸なる人を見るが如し、五十年の間に、かくばかりの變化あるは、いかなる事ぞや、全く、是、淫樂のなす所也、三線、淨瑠璃は、固より、淫聲にて、百年以來の物なれども、貞享の比迄は、三線も、今の如く、煩手に非ず、淨瑠璃も、皆、昔物語にて詞やさしかりしに、其の後、此の藝に、上手多く出來て、我劣らじと、巧に競ふ程に、さま〴〵の妙曲を作りいだして、人の聽を悅ばしむ、淨瑠璃も、俗に近き鄙俚猥褻なる事を語るほどに、今に至りては、詞、極めて賤しく、淫聲いやまさりて、少しも、心有る人は、聞くに忍難くて、耳を掩ふ、これを面白く思ひて樂しむ、淺ましき世の風俗なり、（下略）

わりなしや人こそ人と言はざらめ
みづから身をやおもひ捨つべき

花菖蒲

其二

千稻子

果然！闘の東に雲は荒れて降りおろす群雨、大地を叩いて霧一面に吹き時けど、俄に巖を碎きて寄せ來る激浪伊豆の海に怒り、石橋山に群立つ砂煙空に逆卷きて日影を包めば、笹龍膽の白旗茂立つ森を貫いて風を切れり。何事かと都の者の呆れた顔に蹄に蹴上ぐる小石を飛ばし、息絶え〲の咽元擦つて早打の注進に、それと俄に立上る平家の公達、立つた儘、暫しは忙然として扨どうするか、持ち馴れた兎毛惜氣もなく疊に叩き付くれど、折目正しく前に並べたるたゝう紙は一面に散り亂れて時ならぬ雪は積りぬ。

飾物として眺められた甲冑て、横さまに蒐れど、鎧は櫃の内に逆樣に眠り。離れ〲に塵を背負つて秋風の身を喞つ小手脛當手に取れど、弓の弦は弛みて征矢の鏃は錆び太刀の緒斷れて拔く可き力落ちたるを如何にせん。軍の評議と聞いて驅けだせば、颯も吹く風に庭の梢に結びたる白露ひやりと首筋甜

れを、エヽ汝迄が我を侮りてか弱味に附込む卑怯者めと、　昨日迄哀れと見し心變りて無心の露叱るも可笑し。

大内へ向けて走り行く方々、跡になり先になり蹕の音は物凄く聞えて塵吹き起る都大路。そらこそ戰だ逃ろ〳〵と者共驚き迷ひて走り廻り、氣早き者は調度固めて擔ぎ出し、額鉢合せ肩突き當て中に婦女小兒の泣き聲哀れに響き、昨日迄の笑ひ聲は煙の底に包まれて血は流れねどこヽ修羅の境と變りぬ。

二三日は軍の評議に額撫でヽ青醒めたる顏見合すも、歌に晒らし酒に腐つた脳中能き思案の出べくもあらず。區々たる事に脣叩きて東の空氣遣しげに打眺め、ぬる風吹く春の氷の上渡る如く、氣味惡氣に其日々々を送り行きて程なく、二度目の注進よひやりと膽の底迄冷して如何にも開けば、嬉しや伊東大庭が嚴しき軍勢に源氏の軍はわひなく散り、頼朝も逃るヽに道なくて石橋山の露と消えしと、――安心の胸撫でおろし、アーと肩搖落して吹き出す溜息に張り詰めし心弛み、魂拔けて人形の如く、喜極まりてか互に顏見合せて一言云ひ出す人もあらず。歸れど早や心は昔しに戻りて枕引き寄せ靜に撫で、昨日狼狽へし身を忘れ給ひてから〳〵と打笑ひ、夢

なり〳〵面白からぬ夢の見直しにども一休みとは皆方々の御心が、二三日は續けざまに鼾の聲のみ頻るも笑止。

兼てかくあるべしと見貫いたる知章、かゝる時に少しも騷がず、父知盛卿が健氣なる素性受けて天晴見事、狩衣の袖拂つて靜々と評議の座に直り、一座の面々涼しき眼にちらと寫し、固く緊つたる口元綻ばして滾し出す言葉優しき中に重味は籠れり。あはれ若木の莟よと人は口に上げねど皆それと心は一つ邸へ歸りて燈火の下に獨り深く思へど、兩瞼の邊り露は火影を受けて薄く光れり。アーと胸叩いて思はず……平家の運は末なりけり……

かゝる中にも片時心離れぬは嵯峨野の奥柴折戸の中の親子二人が事。母は病と聞しが其後は如何あらん、菖蒲は狹き胸痛め居らんに、其上此頃我が訪ひ行かぬを案じやせん、オヽそれよ、雨を潜りて駒を飛ばし折戸押開けて、今其の優しき顏見れど、流石日頃の憂も忘らるゝ心地するぞかし。

知章は靜に座に就きて先つ寢入りたる母の顏打眺め、「母人は其後變はおはさぬか其方も變はし給はぬか、いたく窶れ給ひし此御顏其方の心痛は察し入る。」母の病と知

章が事に胸は厚氷張り詰めて中に蟠る憂の數々、さりとて解く可き春風のそよとも吹かぬを如何にせん、朝夕京の空眺めては思の種一ッ宛殖せば、心愈結ばれて氣は愈沈みたる今日、此雨は胸さらりと洗ふ可き辻占か、思ひもかけず其御姿見るのみか、いつもながら優しき御言葉しみ〴〵、嬉しく、暗の夜に燈火の影搜り當た如く、沈みたる顏に色艶自ら浮きて思はず涙浮ますも哀れ。「我片時も忘れはせねど此頃の騷動に取紛れ……」ひやりと胸冷した菖蒲は知章の顏じつと眺め、膝進ませて言葉忙しく「騷動とはいかな事……」優しき言葉も胸の高波に押れて思はず張上ぐれば、寢入りたる母はフト目を覺し、「オヽこれは」思ひ掛けぬ事と起き直らんとせしも、骨は痛み力は落ちて動かれず、知章はゐじり寄りて手もて押へ、「アヽ母人、動き給はゞ御體の毒、何卒其儘に、」云ひ終りてずつと匕り離れ兩手びつたりと疊に合せて恭しく、「御病氣は如何あらんと思はぬ日とてはなかりしも、聞き給ひけん此頃の彼の騷ぎを…………」聞いたる母は力なき眉きつと寄せ、菖蒲は愈胸に荒波立てゝ心も心ならず、如何なる事と二人諸共問詰めれど、知章ははつと息つき、「扨は未だ御聞及びはあらざりしか、いつかはかくと思ひしに果して源頼朝旗舉し、關東は見る間に靡かんとせし

が漸に打鎮め、頼朝も打死せしといへどいつかな死すべき頼朝にあらずとは父知盛も宜へり、されど屢言上して兵備を整へんと勸め奉るも叔父宗盛卿は聞給はず、人の云ふを聞けど其侍に青山綱範といふ奴、何故か我等父子に怨ありて有らぬ事造り構へ、云ふに云れぬ雜言吐き散らし、其御耳を汚すとか、今日も途中にて彼が悴範資に逢へば、道も讓らぬ憎き振舞、思ふさま辱しめ遣しが、叔父上も彼等が言葉に惑ひ給ひてか、我父と疎々しく待遇し是も非も跳ねて用ひ給はず、且つ祖父上にもよくは仰せられぬ由、其上何ぞや我一族は先の捷聞に胸撫おろし、早や腕を擦つて高鼾、アア平家の運命巳に覺束なし。

天井ぢつと見上げて思はず弗と洩す太き溜息、無念に炎る湯氣含み陰々空に舞つて白く棚引けり。「察し給へ、母人、菖蒲殿」首を垂れて聞居たる菖蒲は顔上げてつくづく見れは、優しき眉毛怨みを寄せてキリッと昂り涼しき眼中は露を宿して曇り、白き其顔に血は狂ふて紅一面に散れり。其御心の内や如何あらん、其御無念や如何ならん、御痛はしや御胸の内如何に口惜とおぼすならん、察しまつれは我胸は裂るゝ如く、脆くも知らず〳〵滾るゝ雫、散らさじとぢつと目を閉るも、湧き出る岩根の

眞清水留め兼ねて流るゝを如何にせん。一座暫し寂寞として軒漏る雨の音のみ僅に聞え折り〳〵散り行く落葉窓を撫でゝさ〳〵と落ちぬ。

菖蒲は霞む目を開きて母の方に轉ずれど妾と同じ御心か、彼方に顔向け給ひて兩手を押當て、時々鼻きり給ふ音微に聞ゆり。木の下隠れ流るゝ谷川水増して今は堰止るに道無く、決して押し出す溜涙、思はずわつと泣き伏せバ、驚いたる知章膝進ませて脊に手を當て、「菖蒲殿」、如何にし給ひしぞ、何をかく嘆き給ふぞ、「菖蒲殿」優しくも靜かに背を撫で擦れど、愈堰き來る涙を押へ、御心の内察しまつれど………どうして………嘆かずに………」嗚呼かく迄我を思ひてか、優しや其心根必ず忘れは置ぬ、何につけ我身の爲思はぬ事なけれど今日は殊更骨に對へていぢらし、先に我身行かで其心痛慰めんと思ひしを、無益事云ひ出して又一層増せてけり。アゝされど我はいつか戰の場に旅寢す可き身、若し我身居らずならバ如何に手寄無しと嘆くならん、心細しと思ふならんに、慈しさの胸に浸みて思はず顔外向れど、落つる涙は俯したる菖蒲が脊の上に散れバ、垂れたる黑髪波打つてぶる〳〵と震ひ、疊撫たる後毛は風なきに亂れぬ。「忝なし菖蒲殿、許して給へよ、母人何卒御許し下さ

れ、思はぬ事に御心痛ましめて、

雨は止たりと見えて軒の玉水音も聞えず、朧なる月影雨戸を漏れて濡り勝なる燈火影重げなり。折しも俄に家搖りて壁の土むさッと落し、琴の絲一時に斷つたる如くぷつッと響きて電光一閃火影を奪ひ、知章が耳朶擦つて壁越に突き出す鎗先一尺餘り、餘勢風を孕むで燈火ふはりと瞬きぬ。餘りの不意に愕然として胸躍らしながら早くも一歩飛び退つたる知章、腰の太刀拔手も見せず千段卷ばたりと切落し、ずつくと立つて、菖蒲殿母人に過無きやう……」云ひ棄てゝ、雨戸蹴放し、一尺下つて太刀青眼に窺へば、アッ、矢聲諸共颯音に鳴つて頭上に閃く稻妻、横に體を拗れパ空を切つてだち〳〵と踏蹴ながら兩足目懸てエーヤッと薙げば、ひらりと飛び上る瞬間に上段より斬りおろす一太刀、哀れ脆くも最後の悲鳴跡に殘し地響打つて堂と倒れぬ。血刀引提げて立たる知章、雲の足並打眺めて眉を顰め　何者の戲れか物にこそ寄れ、然し此身に怨を受く可き覺えはなきが……」首を捻つて考ふれば群群と胸の明鏡に寫り來る今日途中の出來事、優しき口元に莞爾笑ひ、「憎き奴等、彼等が執念の刄よもや我金鐵の身にはたつまい。」

吹き渡る風あらぬに横手の繁茂俄に騒げを見返る途段、太腿見掛けて又も繰り出す大身の鎗先、飛び除けて切りおろせをやッと後に電光一閃、ひらりと五體捻りて丁と受け、喚き叫むで切り込めバ泥を蹴上げ土を散らして前後左右に隙もあらず飛び來る蝗、嵐に散るゝ飛花落葉、其日間縫つてふはりふはりと身は陽炎の知章、隙を得たるかエーと呼べを、血煙颯と立つて一人は仰向樣にづをんと倒れぬ、失策たりと今一人は鎗を抱へて逃げ出すを、生擒らを後日の證據と間一髮に胸の分別、己れッと云ひさま刀脊打に肩先目掛けてしたゝかに打を、斬れたりと思ひてかアッといつて倒れかゝるを、足を上げてはつたと蹴り、首筋抑へて其が上に大盤石、跳んとしてをたをた悶けを忽ち兩手脊に拗ぢ上げ、五體細繩に隙無く括り、早や微塵も動く事ならず、其儘立木に繫ぎ置きて尻目に睨み、「動かバ生命は無きぞ」。刀の血汐靜に拭ひ鍔音立てゝ鞘に收め、入らぬ事にあたら手數を費してけり、空打仰げを朧月の影白みて、雲の絕間洩るゝ星の光曉の風にぴか〳〵と瞬けり。

内に菖蒲は母を脊に隱して枕元に小膝立直し膚離さぬ短刀目釘手汕に濕して確と握り詰め、優しき目眈と見張つて表の太刀音に耳欹ていざと云はゞすらり鞘走らさん

ず勢、時は凝たる處に少しも騒かず、「狼狽へ給ふなのう菖蒲、敵の二三人知章様に何程の事かおはさん」體は弱りても心はびくとも動かぬ盤石の塊、裂けても摧けぬ心根の雄々しさ、流石昔の名殘汲れてゆかし。

文林

雪中興　　近衛忠煕

面白きけさのゆきみにこまなべて
　ゆくらん人のあまたあるらん

社頭雪　　毛利元徳

世の塵をはらひ清めてちはやふる
　神のみまへにつもるゆきかな

早春梅　　東久世通禧

ふたつみつ梅の初はなさきにけり
　春たちそめししるしはかりに

山居雪　　佐々木高行

ひね鳥のあさるこゑさへたえにけり
　雪ふりうつむやまかげのいほ

深山雪　　鍋島直大

なく鳥のこゑも聞えぬおくやまは
　雪よりほかのいろなかりけり

冬林　　長岡護美

ふゆかれの林のこのはちりはてゝ
あらはれにけり山のしたいは

社頭雪　黒田清綱

御かゝみにひかりかはして神路山
つもれる雪の清くもあるかな

暮村雪　高崎正風

雪の色はまた暮なくにともしひの
かげみえそめつ遠のひとむら

旅雪　前田利鬯

關の戸を鎖ぬ御代にもゆかれぬは
雪ふりつもるたびちなりけり

車　諏訪忠元

ふみ車すゝみもやらでいたづらに
轅ひぢをのみつみにけるかな

森雪　宮地厳夫

紅葉みしあとゝもみえず白ゆきの
降り積りたるかみなひのもり

雪中鳥　小出粲

かゝけたる簾のうちにいりにけり
雪にうゑたるともなしすゞめ

海邊雪　坂正臣

磯山のまつのあらしのはやければ
降れどもゆきは積らざりける

岡雪　植松有經

おく霜もましろに見えし水くきの
岡のかやはらゆきふりにけり

行路雪　谷勤

ゆく駒のひづめよかけてたまぼこの

大路のゆきをたれちらすらん

冬雲　大口鯛二

時雨とも雪ともならでやまのはに
たゞよふ雲のいろのさむけさ

常磐御前雪行のかた　松浦辰男

常磐なる松もゆきにはたへかねて
暫したゆむかあはれなりけり

池水波靜　師岡正胤

をさまれる御代の姿のいけみづは
波のたちゐるものとけかりけり

隣梅　片岡正占

中垣のへだてのみにてへだてなく
にほふは梅のかをりなりけり

夜雪　三浦千春

さやかにも見えわたる哉ぬば玉の
やみをも雪はふりかくすらん

田氷　西川須賀雄

朽のこる鳴子のなわをよすがにて
結びたる小田のうすら氷

雪　糸山貞幹

道もなく雪つもるなりふりなはと
契りしひとのおとつれもなし

阿宮阿信　佐々豊水

宮城野のはぎか花よりうるはしき
名をよろづ代に殘しつるかな

祝　安木弘蔭

よろづ代も信夫の里のもぢずりの
たゞしきいさを稱へざらめや

とつ國もよりこせ山のたまつばき
つら〳〵御代の榮ゑをそろみる

里雪　　草野　隆道

むかし我かよひし道もたづねはてゝ
雪こそつもれをかざきのさと

名所雪　　千日　亮

ふる雪に小しほの山は見えねども
立けむりこそしるべなりけれ

新年風　　勝家　貞良

門松にふきかよひたるあさかせは
治まる御代のしらべなりけり

島雪　　鍋島　榮子

とくはしる車にのりてふるゆきを
いざみに行んまつかうらしま

月夜雪　　柳原　愛子

夕月のかげはさしながら窓の戸の
こずゑましろに雪はふりつゝ

馬上雪　　小池　道子

むちうたぬ駒ぞいさめるしら雪の
ふりかゝれるや嬉しかるらん

車中雪　　松平　健子

花なちぞ嬉しからまし小ぐるまに
ちりくる雪のさむくもあるかな

夕雪　　鳥尾　廣子

吹風のわきてさむけきゆふぐれの
そらより雪もふりいでにけり

冬山　　鶴　久子

谷かげの庵までみねてふゆがれの

みやまも淺きこゝちこそすれ

冬野　中島歌子

冬の野は小松がはらになりにけり
すゝきわけしやいづこなる覽

雪中若菜　諏訪晴子

春日野に若菜たつぬとゆくひとは
雪かきわけてつみはやすらん

雪中梅　三輪田眞佐子

白妙にふりつむゆきのかたえより
そのいろなからかをる梅かな

社頭雪　屋嶋すう子

御社の千木のかたそぎ見えぬまで
ふりうづみたる今朝のしら雪

新年花　安東菊子

梅の花はつ日のとかみふたつ三つ
みなみの枝にさきそめにけり

寄雪祝世　師岡須賀子

雪におとをしむ人なくなりなゝん
野山こと〲ひらけゆくよを

雪中若菜　片岡光子

君かため雪のふる道ふみわけて
つみてかへらん今日の若菜を

我夫　柴田千稲

袖吹き返すかぜさむみ
夕日は落ちぬ山の端に
塒にかへる闇がらす
二つ三つ四つ聲枯て」
戰のにはにてまとめて
劍抜き持ちうちふれど
霰たばしる小手のうへ

かくぞますらん我夫は
窓にさし倚り見渡せバ　霧はこめたり天津空』
敵守る城にたび寢して　征矢を手挿みうつ臥む
片敷く鎧にしもしろし
かくやおはさん我夫は
枕もたげてうらなけむ　燈火暗し夜は更けて』

甲午試筆

勝家貞良

改りぬる年の始の喜につけても、まつ思ひ出らるゝは、おのが身の、こし方、行末のことなるぞかし。世の人には、なべて、たらちねのうるはしきかんばせをうかめつゝ、めでたく春を迎へ給ふめるに、おのか身一つは、いかなる宿世にやありけむ。ちゝのみの、父君には、未だ物心も覺えぬ程に立ち別れ、殘る涙のかわきもはてなきに、また、はゝそばの母君にも、はかなく世を去り給ひぬ。さらぬだに、安からぬ身上なるをまして、かくなりはつれは、辛き上に、猶、苦しみを重ねて、やうやう、今の身とはなりぬ。されは、古人の、樹靜ならむとすれども、風之を動かし、子孝ならむとすれども、父母いまさすと、いひ給ひけん言の葉も、いまは、おのが身の上となりて、短きあしのふしのまも、また、忘らるゝべき時やはある。まして、かう年の始めなどの、樂しき折につけては、ことに、忍び出でられて、父君この世を去り給はさらましかは、いかに心つよかるべきを、母君此世におはしましなむ、ともに樂しく遊び過こ

さましをと、忍ぶる涙に月日も曇りて、袂のかわくひまとてもなく、春たつ空のゝどけさに、軒端にかをる梅が香も、梢に囀づる鶯の音も、いまはたゞ、我身の悲しみを催はすつまとならぬぞなきや。

かく、幼き時より、恃みまゐらする父母に別れしことなれど、もとより、正しき庭の訓をも受くるを得で、むなしく、怠りかちにのみ、月日を過し來つれバ、今更、何一として得たることとてもなく、徒に世の中に立ちぬるこそ、かへすく\も、また、口惜しうらめしけれ。されはとて、過ぎ去り給へバ、いかに悔み侘びぬとも、いひかひなしや。さては、身に積る年浪も未だ深からねバ、よしや愚なる性質なりとも、今より心を改めて、勉め勵みなバ、少しは道にもすゝみ得て、言葉の花のうるはしき、色香ならずともさがしもとめて、こをもて、なき父母の御墓の前の手向にせんも、なとかかなはさるべきと、かく、思ひ立ちぬれバ、いさゝかは心も慰みぬ。哀、いまさらあらためていふまでもなけれど、君の恩につきて、尊ぶべきは、親の恤にぞありける。すへて、臣としては、其君を慕はざるものなく、子として其親を思はぬものとてはなし。されど、おのれらのごとき身となりては、さて何かはせん。凡そ、世の中に人の樂はあまたあれども、なべて父母のうるはしきかんバせを、拜みまゐらするバかり、樂しきはあらじかし。されバ、世の嬢君等よ、父母のおはし給ひぬる程に、心の限り樂しみつくされ給ひてよ。この

楽しみとはいかに、孝をおきて他にはなからむ。
おのれ等の身となりて、悔の八千たひかさぬとも
いかて、其甲斐あらん。

雜報

●大祝典　かけまくも、あやに畏き我が皇上は、皇后宮冊立せさせ給ひしより、ことし、二十五年に當るをもて、來る三月九日、大祝典を擧げさせ給ふとぞ。こゝに謹み惶みて、兩陛下の、千代萬代に並ひ榮えまさむことを、ひたぶるに祈りまつるになん。

●裁縫科意見　熊本縣尚絅女學校長内藤儀十郎、同教頭谷忠林藏の兩氏は、この度、小學校裁縫科教授法に關し、左の意見を、井上文部大臣に差出したりといふ。今、こゝに掲げて、諸嬢に紹介せん。

小學裁縫科教授法に關する意見。

不肖儀十郎等謹て惟るに女子の就學者を増すは可成的學科を實用に近からしむるに在りとて尋常小學にも裁縫科を賦課せらるゝ旨今般各府縣へ御訓令相成りたるは不肖等の常に仰望する所にして實に感激の至りに堪へず夫れ一人の教師にて多數の生徒を教授することは學校經濟上最必要の事なり然るに從來の裁縫教授法は大抵左の三個の弊ありて多數の生徒を教授する能はず又大に進歩の遲緩なる所あるを見る

第一　同級生の裁縫物個個別別なること

各地方裁縫教授の現况を察するに大抵一人の教師にて十四五名乃至廿餘名の生徒を一教場に集て教授するを常とす然るに單物を縫

ふ者あり肌著を縫ふ者あり小供衣裳を縫ふ者あり袷羽織綿入其外襠物等を爲す者ありて凡五六種乃至七八種に別れたり一通りの說明をなすだも猶一時間餘を費さゞれば結了せざる程なり是以て教授中質問蜂起して教師は左顧右眄之が應答に遑あらず遂に生徒の厭倦を來し左隅には雜談右隅には居眠りを爲す等實に不體裁の有樣なり斯の如きの教授法にては一時間の授業何程の事をも成し得る能はず多數の生徒を教授することを望む可きに非ず

第二　分解法に用ゐざるが故に教授上困難なること

初めて針を持たしむる幼年生に最初より小供の肌著とか單物とかを以て總合的に教授するが故に針は動かず縫方は知らず質問四方に起り教場益々喧騒して教授愈困難なり亦豈多數の生徒を教授するを得んや

第三　同一物を數回縫はしめざるか故に進歩の遲緩すること

從來の教授法を見るに今日は單物を縫ひ明日は袷を縫ひ又其翌日は肌著を縫ふと云ふ有樣にて時々種類を取り換へ同一物を數回縫はしめざるが故に手指の練習を缺き又觀念を鞏固にする能はず是大に進歩の遲緩なる所以なり

之に加ふるに今の裁縫教師たるもの多くは一時雇ひの人にして教授法管理法の何物たるを知るもの鮮し斯の如き教師を以て斯の如き教授法を執る女子就學の少なき亦宜ならずや且今日算術習字科等の教授法を見るに往昔に比すれば著く進歩せしに裁縫科に至りては依然として舊慣法を改めざる者は大抵世の教育家たるもの裁縫は　男子の知る所にあらずと云ひ委て顧みざるに由るなり即教育家中該科の教授法を研究し管理法を講說したる者果して幾人かある然らば則之を講明して習字算術科と並進せしむることは最目下の急務にして單に之を婦人にのみ放任す可らざるなり

林藏昨年二月より五月に至り東北地方より兩京間又西南各地を漫遊せり其際裁縫科教授法能く教育の理法に合ひ又一人にて多數の生徒を教授し得べき法を調査せしが西南地方は勿論兩京中有名の女學校と雖此法あるを見ず獨り此法ありと認めたる者は宮城縣下仙臺市元荒町朴澤三代治の設立に係る私立松操女學校の裁縫科教授法のみ尤該校の課程は裁縫科專門なれば頗る高尚にして直に之を普通學校に實施するを得ざるに由り歸縣後儀十郎と謀り多少其課程を斟酌變更し先つ教師の練習を目的として生徒凡そ四十名を集め昨年夏期休業中七月下旬より八月下旬迄毎朝三時間づゝ右朴澤流の教授法を試行せしに頗好成績を得るの見込あるを以て九月以來斷然之を實行せしが本年四月に至り頗る好結果を得て生徒の進歩轉た顯著なるを覺えたり今其實況の概略を擧げんに昨年九月初めて此法を施行する頃は二尺五寸の裁縫布を以て針目一分五厘と定め直線縫を爲さしむるに三四十人の生徒中最早く縫ひ了る者凡そ五分時間を要せしが今日に至りては早き者は一分間以內晩き者も三分間を出でず又單物の組織（三人を一組とし苦手明なき隊にして一個の單物を縫はしむる法なり）を爲さしむるに之を裁ち之を縫ふに早きは四十分以內晩きも一時間を出でず右は當校四年級の生徒にて高等小學校四學年

級の生徒に相當する者なり而して其手際の如きは衆人の前に出すも格別耻かしからぬとの公評なり將來益改良進歩を圖りしかば縣內各地の教育家來りて教授法を視る者縱々絕ゑず旣にして熊本市內各尋常小學校の如きは熊本市教育會の決議に依り體操科の時間を以て裁縫科に代へ四學年級の女生徒に此法を實施せしが一週僅に三時の教授時間よして本年四月より七月迄の短少月日なるにも拘らず頗る進歩の實況を呈したり斯る有様なるが故に熊本市の如き本年度は四學年級より裁縫科を賦課したるも來年度よりは三學年級より賦課する筈にて當時其計畫中なりと云ふ

然るに分解教授とは如何又同級生徒殘らず同時に同物を教ふるには其原料は如何にするか恐らくは都會の學校には適當なるも僻地の學校には實施し難かるべしとの論者あれども是又然らず左に木綿單物教授法の概略を擧げて之を述べん

初め器具の整理、尺度數、針の持方、及姿勢（以上說明書あり）等を教へ次に素縫布と稱し鯨尺二尺五寸の布を以て素縫曲線を教へ又次に衣服の名稱を敎へ（以上說明書あり）夫れより素縫布を種々應用して糸結留針縫合六種絎方三種（別に雛形あり）を教ふ之を習熟したる後單物裁方罫引を教ふ罫引とは例へば幅九寸にして長二丈七尺の反物とすれは之を十分の一に縮したる紙を用ゐ之に罫を引き裁方を稽古せしむるなり（別に罫引の雛形あり）已に裁方を覺ふれば又素縫布を應用して單物の袖縫（別に雛形あり）を教ゆ此の時に至りては衣服の名稱糸の結方留針各種の縫方絎方等一切已に習知せしを以て唯號令を以て袖口何寸袂廻何程なることを示し之に付號を付けしめ而して六種の縫方の內何の縫方を用ゐて縫ふ可きことを示すべし斯く同一の時間に同一の形をなし號令を懸けて一齊に教授する故教授の容易にして管理の行き屆くことは他の習字算術を教ふるに異ならず教場靜肅にして更に喧雜の患なし又行付（別に雛形あり）は二個の素縫布を用ゐて一を身とし一を袖として之を教ふ前縫即襟衽（別に雛形あり）は素縫布を以て衽とし袖口布を以て襟に代用して之を教ふ褄伏（別に雛形あり）も亦素縫布を應用して之を教ふ行付以下の教授法も袖縫法と異なる所なければ敢て細說せず而して以上習熟するの後實地縫を教ふ實地縫とは總合的の教授法にて初め裁方をなさしめ次に袖縫行付より漸次褄伏迄を一時に縫はしむるなり斯の如く一々分解して一歩は一歩に進め歩々習熟するの後總合的の實地縫をなさしむるは所謂易より難に入り分解より總合に入る教授法の定則にして又漸く佳境に入るの趣味あれば十歲未滿の幼兒と雖ども一人の教師にして四五十名は容易に教授し得らるべし然るときは僻地の學校に於て單級教授の編制法を用ゐるに方りても此の法を適用せば甚だしき困難は感ぜざるべし且僅かに二尺五寸の素縫布二個と袖口布二個あるときは又之を應用して袷綿入の類も教ふることを得べし斯く簡易にして何物も容易に教授するを得るを以て寒村僻邑には最適應なる法と謂ふべし若し總合的の教授を爲すに方り生徒原料に苦むの虞あらば時候に應じ夏季には單物秋冬二季には袷綿入の類を縫はしむれば大概此虞は免るゝことを得ん此外縫箔なきに非ず一ヶ

月生徒一名に付三錢位づゝ貯金せしめ之を以て原料を求め學校に備へ置くべし此事我尙絅女學校已に之を履行せしが原料には更に差支を生ぜざるなり
又朴澤の學校に就き其實際を見るに管理も充分行き届きたり例へば生徒一切の器具には悉く其姓名を記して紛亂を防ぎ又何針は何本何品は何個と其數を定め此外決して多分に用ゐしめず糸卷の如きも凡三個と定め一は白糸一は黑糸一は屑糸を拾ひ之を卷かしむる等注意甚だ周密なるが故に教場內針一本糸屑一筋落ちたるを見ざるの有樣なり是畢竟教授法の善良なるが故教師許多の餘裕ありて斯く管理も行き届くものゝ如し然らば則教授法を改良することは頻月下の急務にして御訓令の旨を達するも亦全く茲に在りと信ず我尙絅女學校も猶一層教授法を改良するの精神にて先頃より裁縫教師一名上級生徒一名を仙臺に派遣し朴澤に就き實地研究せしめ居りしが當時已に該校所定の尋常科を卒業し來月中旬頃迄には高等科も卒業するとの報を得たり右兩名歸縣の上は縣下裁縫科教授法の改良に着手し益該科の普及を圖り聊御訓令の旨意に副はんと欲す閣下若し貂嶷(?)ずして不肖等の言亦取る可き所ありと謂はゞ請ふ朴澤を招き尋常小學校に裁縫科を實施する教授法を御下問あらんことを或は今般御訓令の旨意を達せらるゝに幾分の裨益あらんか謹で御參考の爲め現今熊本市各尋常小學校に實施せる教授細目及其說明雛形尙絅女學校の裁縫科課程朴澤三代治の編輯に係る裁縫教授書を併せて之を獻す若辱く覽觀を賜はゞ何の幸か之に如かん頓首再拜

●小說は、婦人の、最愛づるものなれども、之を讀みて、利を受くる人は、甚少なく、害を受くる人は、いと多し。賣りて、利を得るを以て、主とせる小新聞の續きもの、はた、或一派の人々のものせる小說は、ことに甚しきものあり。まづ、その害といふは、一には、時間を費し、二には、心を亂し、三には、遊惰に流れ易し。この害は、日常の人事を妨ぐること。尤甚じきものなれど、これらの小說は、一切、見ぬをこそ、婦人の淑德とはすべけれ。小說を見る暇あらバ、育兒の書を見よ。家事經濟の學を講ぜよ。家內衛生の法を學べよ。その外、何にまれ、人事に切要なる書は、世上に夥しきものなり。これらの書は、皆讀みつ

くしたりとて、己が身を傷ふ憂なきのみならず、其の利益は、いと多きものなることと、いふまでもなきぞかし。世の諸嬢は、いかに思さるゝにや。

●衣食の望は、世の常の人には、必、あるものなれども、人は、もと、衣食の爲に生まれたるものならねば、決して、奢を長ずべきにあらず。いかに、結構なる衣裳を纏ひたりとて、其の身の德は、もとの如く、いかに、美食せりとて、さほど、人の敬も増さず。身も、また、健壽なりとも極めがたし。されど、人は、その分に相應なることをなして、質素を主とし、過分の希望を起こさざるこそ、永く、其の身を保つ道ならめ。以上述ぶるが如きは、いかにも古めかしきことにて、諸嬢は、ほゝと打ちゑみたまふめれど、また更に、新しく試みたまへ、いかに古めかしくとも、新しき益なからめやは。　（以上、件小石川道子投）

●貞婦孝子　香川縣にあり。縣知事よろこびて、昨二十六年十一月二十九日、左のとほり賞與せられしといふ。あゝ、貞婦なるかな。孝子なるかな。

香川縣士族井上嘉平妻　田東　やす

夫嘉平明治十四年風症に罹り爾來久しく病床に在るも常に能く看護を盡し傍ら勞力を以て家計を支へ十數年一日の如く其貞節洵に奇特とす仍て其賞として金五圓下賜す

香川縣士族嘉平養子　井上喜次郎

平素能く父母に事へて孝道を盡し勞役以て頤養の資に供し多年怠らず洵に奇特とす仍て其賞として金二圓下賜す

教の庭

二月五日兼題　若菜

天　熊本縣菊池郡隈府町　平塚千代子

鶯のなくかた野の原にうち出でゝ
まづ摘む千代のはつ若菜かな

地　大坂府西成郡今宮村　松田いし子

摘みはやす野邊の若菜も嬉しさも
つゝむに餘るをとめ子のそで

人　愛知縣愛知郡熱田町大字旗屋　高木こう子

嬉しさを何につゝまんはるの野に
ひろふ若菜のたもとにあまれるを

人の位　岡山縣岡山市上之町　横田 毅子

たづのすむときはの松の下にこそ
千代の若菜はつむべかりけれ

（天地人のほかは原稿到着順なり）

はるされど雪間をわけて若菜つむ
野邊の日影ぞのどけかりける　神田 春子

梓ゆみはるはこゝろもひき立ちて
よはひを野邊の若葉つむなり　石井 德子

雪とけし門田のみぞにをとめごが
そでぬらしつゝね芹つむなり　永井さい子

昨日まで雪のつみたる野邊ながら
はるたつけふは若なをぞつむ　羽田三緒子

わかなつむ袖まださむき春ながら
日陰さすがにのどけかりけり　羽田たか子

來て見れど雪の下なるはつわかな
はるの日陰にもえいでにけり　土生 清子

立かへる春をしりてやゆきの中に
こぞの古葉のわかゝへりけん　上野 兼子

吹きさえし嵐の風もたえ果てゝ
はるのわかなはもえ初めに鳬　高井 米子

名にめでゝいざ摘みて見ん新玉の　小野 秋子

としをふる野にもゆる若なを

春かすみたなびく野べを見渡せば　永井きわ子
わかなの色もみどりなりけり

春の野にくつめどもつきぬ若菜こそ　高木たけ子
かぎりなき世の例なるらめ

少女子の摘てふけふの日にあへど　松田静枝
わかなもゆきの下にまつらん

吾もまた乳房ふくみしいにしへに　松田もと子
かへりやせんと若菜摘むなり

あわ雪を頭におきて萌えいづるや　松田孝子
若菜ながらもおきなさびせる

來て見れど物こそいはね世の人に　橋本かすえ
はるをつげ野の若菜もえつゝ

おりたゝど袖やぬれましなつみ川　川村もとゑ
水ぎはに生ふる若な摘むとて

しら雪の中にみどりのわか菜こそ　川村ともゑ
若かへりたるすがたなりけれ

少女子がこゝろをのべに打むれて　野尻鶴子
おなじ若菜をつみはやすらん

さしのぼる朝日の蔭ものどかなる　永易たきの
かすみの野べに若菜つむなり

いゝ年もかはらで春のわかなつむ　永易いくの
腰のたもとはつゆにぬれつゝ

少女子がそでふりはへて春日野に　千日文子
いまや若菜をつみはやすらん

霞立ち野邊はわかなとなりしかど　平野君子
なほきえやらぬ峯のしらゆき

父母にあふるわしたのあつものに　佐々有鄰子
はる日にもゆる若なをぞつむ

芹澤のわかなつまんとおりたてど　小橋幸子
まだとけやらぬこほりゐに隠

去年の春手をりしをぎのやけ原に　千々波橘子
また萌えいづるはつ若なかな

白雪ののこれる野邊にわか菜つむ　鹽井ふく子
心ははるのものにぞありける

山はたの畔にむれゐるうなゐ子の　篠置淸子
わか菜摘みつゝ歌ふのどけさ

山里のそのゝわかなを摘むをとめ　篠置直子
そでもみどりの春のいろかな

野邊近きかひこそなけれ初わかな　田中松子
つまんとすれど雪の降りつゝ

いつしかも若菜の春となりにけり　河野文子
昨日はゆきのつむと見しまに

諸ともにつむとしいへば春日野の　下條たけ子

ゆき間の若菜見るがわびしさ

昨日けふそらの高峯もはれにけり
いざ野に出でゝ若菜つみてん　新沼すみ子

うらゝかに照す日蔭のかげゝれど
野邊のわかなももゑ出にけり　新沼すゑ子

もゆればやけふ解そめし雪の野に
老もわかきもわか菜つむらん　伊達富貴子

梓ゆみはる來にけりなさらゆきの
ふりつむ野へにわか菜もえつゝ　水谷清子

打むれてつめどかたみに滿らぬは
はるまだあさき若菜なりけり　植木鋼子

子の日せし小松が原にそではへて
ち代のためしの若菜をぞつむ　大橋てい子

めも春の野邊に若菜のもえ出でゝ
つまゝほしくもなりにける哉　横山柳子

むら消のゆきまの若菜もえ出でぬ
野べの少女や摘みはやすらん　横山すが子

春たてば雪まだふかきむさし野に
きのふもけふも若な萌ゑつゝ　井出信子

春風のふくがまに〳〵もゑいづる
わか菜つみけり磐手野のさと　花山やすえ

打むれて根芹摘むらんをやま田に　花山みさを
少女がうたふこゑの聞こゆる

去年つみし飛火の野べの雪間より
今日もゑ出でしはつ若なかな　國富直子

白雪のふる野のわか菜もえしより
老もかたみにつみぞあそべる　堤かね子

春くれどのどけき君が大御代の
千代田のわか菜つみぞ祝はん　佐藤千代子

のどかなる春の恵のめでたきは
つむ手にあまる若菜なりけり　稻田君子

老の身もかたみよいでゝ春の日に
よはひを野邊の若菜つむらし　藥師寺芳子

少女らが袖につゝめるはつわかな
春のにほひはかくれざりけり　土屋てい子

里の子が若菜つみたるあと見えて
春日の野邊はゆきまだらなり　猿渡康子

君が代のめでたきためし少女子が
こゝろを野邊に若菜つむらん　諏訪晴子

こゝろをも野邊に摘み得し嬉さも
たもとにあまる初わかなかな　横山きみ子

はるされど心を野邊のうなひ子が
雪間にいづるわかなつむなり　江馬信子

白雪のふる野につみしはつわかな　内藤清子

去年の春つみにし野邊にきてみれど
はつかながらに猶ぞうれしき　渡邊　鉒子

白雪の消えしひまよりもえ出づる
我まちがほにわか菜もえつる　宇野さく子

いざわけんもゆるわかなも白雪も
ときえり顔のはつわかなかな　勝村まさ子

鶯のはつねの小まつひく間野に
むら〳〵見ゆる遠近の野邊　吉田　芳子

消えがての雪間にもゆるはつ若菜
ひかれてわれも若菜つみけり　横瀬たか子

名にしおはゞいざ摘てまし初若菜
老いぬ千年のためしにはつむ　山田よね子

少女らか袖やゝけましかげろひの
千代も老せぬためしにもがな　宮川きよ子

道はわれど人もとひこぬ山さとは
もゆる春野よわかなつむ見ゆ　廣田とめ子

野邊に出で丶緑の若菜摘み見れば
若菜ぞはるのえるべなりける　片岡　光子

わがやども霞のよそとなるまでに
千世もかはらぬ色そこもれる　青木はる子

うちむれて遊ふのみだに嬉しきを
遠く來にけりわかなつみつ丶　碓非のぶ子

春日野に心をのべてわかなつむ
かたみに千代の若菜をぞつむ　碓非たけ子

少女らが若菜つまんとえめし野に
むかしかたみの思ひなしつ丶　碓井わか子

うづみてしたに間の氷とけそめて
去年のかたみの雪そのこれる　小原さと子

春の野に若菜つまんとおもふどち
若菜つむへくなりにけるかな　笠原よし子

千早振かみ代にあへるこ丶ちかな
袖ふりはへてゆくぞたのしき　淵井とみ子

おもふどちかたみにつみし初若菜
のどけきそらに若菜つむ身は　熊谷あや子

浪花江のゆき間にむれて小女子が
うれしさともに餘りけるかな　大槻たつ子

ち丶のみの父のこのめる唐なつな
あし葉かくれの若菜つむらん　唐澤　若子

むら消えしゆきまにもゆる初若菜
よし寒くとも摘みてたけまし　柴　ふさ子

ゆきの間にいざゆきて見ん初若菜
いざをち近の野邊につみてん　伊藤くめ子

あし鶴のむれし雪間をあざりつ丶
消えなむ人のつみぞはつべき　市川みね子

千代のためしの若菜をぞつむ

雪間よりもえ出る野邊の若菜こそ　目出度御代のしるしなるらめ　木下ゆき子

春の來て若菜はいつかもえみけり　布留野の雪もいまやとくらん　樋口ちへ子

芦の葉にかゝれる雪をかきわけて　里のをとめやわかなつむらん　上田はる子

白雪のふる野の若菜もゑしより　ともに袖にもつまぬ日ぞなき　井澤やす子

たく椙のもゆる春野にめづらしく　若菜つむべきころは來にけり　井澤しく子

鳥がなくあしたの原にきみがため　み雪降るともわか菜つまゝし　市川けさよ

春さればこゝろをのべに少女らと　若菜つみつゝ今日もくらしつ　荻原八千代

春の野のゆき間の若菜今日もまた　うちむれて摘む四方のさと人　堀口菊子

くるゝまで若菜つみつゝ少女らと　おなじこゝろに遊ぶおいびと　荻原みつへ

雪間よりもゆる根ぜりを尋ねつゝ　君がためとてつめるさとびと　征矢みつ子

山里はまだしら雪のつみながら　藤澤常代

都はのべにみどりをぞつむ

いざ兒どもも若菜つまむや朝日さす　み垣の野邊をゆきかへりして　大槻やすへ

うれしさに終日のべにわかなつみ　月のひかりにかへるいへつと　大槻たづへ

ともし火の明くる朝もわそればし　少女のともとわか菜つみつゝ　唐澤君子

つみはやす若菜のいろぞ民くさの　君がめぐみのしるしなりける　南大路正子

もゑそめし春の若菜をつみてこそ　飛火ののべもしのばれにけり　南大路芳枝

少女子にさそはれいでゝ春日野の　若菜を今日もつみてけるかな　加藤健子

賤の女が親のためにと若菜つむ　こゝろも手寒くあわゆきぞふる　猪原すみ子

大御代の春のひかりにもえそめし　野べの若菜ぞみどりなりける　野田とめ子

朝かすみ春日の野べに立ちしより　老もわすれてわか菜つむなり　粂山敬子

たらちねのおやのためとて稚子が　雪ふるさとにわか菜つみけり　辻やす子

大君のみゆきののべにうちむれて　木原あさよ

老もわか菜をつめる御代かな

つむからに千代を覺えて嬉しきは
よはひをのべの若菜なりけり
佐藤　秋子

二月五日兼題　紀元節の記

天

大坂東區北新町二丁目　土屋てい子

大和國白橿原の大宮に天の下志ろしめしてかけまくもかしこきすめらみことの天日嗣の高御座にのぼりまし〳〵神ながらなる大御位に即きたまへりしよりみかどの御位は天地のむた窮みなく榮えますべき基を創めたまひし其日にわたる今日をしも生日ゝ足日と定めまつりてわが大朝廷をことほぎ奉ることになむありけるさるは外國もためしなきこの
大皇國の御光りを誰かはあふぎ奉らざらむされバ家々には日の御はたをさゝげて御酒さゝげつゝよろこびてうたげまひさゝめきわたりぬかく山の尾に薪樵る山かつより津々浦々にあさりする海人にいたるまで各かしこく其ほどにつけつゝいはひまつるはみな白橿原の大御神の御恩賴によりて今もかはらぬ御代の御惠みをいなたきに戴き奉るをよろこびことほぎ申すになむあなかしこ

地

大坂府西成郡今宮町　松田静枝

けふはいかなる日なるらむ思ひまつれどあやにかしこき我天皇の遠祖神武天皇が不知火の筑紫のうみの仇浪に御衣の袖をうるほし玉ひ吉備のうらより蘆が散る浪花津を經て空みつ大和の國にいりまし玉ひ畝傍の橿原にて天皇の御位につかせ玉ひし日にぞありけるあはれ神ながらの日の本も今日ありてこそ建ちしなれ月日流れて爰に三千年の春秋を迎へ我が敷島の大和島根は動ぎなくたゞひあらしの山櫻と共に外つ國ぐにゝ匂ひゆくはいかにめでたき事なるらむ空蟬のあるにかひなき賤が身も我が日の本を常盤かきはに千代田の宮の幾千代かけて祈りまつらでやはされど限りなき年のうちにいつはあれど今日ぞかりめでたき日はあらじ九重の宮都の田鶴や幾万代と舞ふならむ竹の園生の鳥や八千代と歌ふならむ

人

福岡縣穗波郡飯塚町　廣田とめ子

さしのぼる朝日の影は家毎にかゝげし國の御旗とともにかゞやきて風もしづかに庭の草木の枝もならさず人皆の心のうれしさは面にあふれてめで度

こそ覺えはべれけにげふは三千年よもちかきむかし日の本のよろづの國にたぐひなく千代萬代にうごきなき國のゐとゐをさだめられんとて皇御祖の御位につかせ給ひし日なれバ日の本のもろ人は誰か壽ぎまつらでやむまるべき

人の位　岩手縣釜石町　新沼すゑ子

さしのぼるいともさやけき朝日影の家毎に立て連ねたる日章旗にかゞやきわたりていとものどかに見えたるはわが皇室の御祖先にまします神武の天皇の紀元節を祝ひまつる日にてぞありけるそも此の天皇の天つ御神の詔勅をうけたまひて一たび天が下をしろしめし諸國を平げ服して我が日の本の基礎を立てたまひしより今日に至るまで連綿として少しも外國人の爲に冒されたるが如きことなくいや榮えに榮えゆく國ひとへに天皇のみいづにぞあるされど妾等國たみのかくものどかにたひらけく治まる御代にあひてあつきめぐみの露に霑ひ何たらぬわざもなく活しゆくも實に天皇の賜ものなりかし世の少女子等國を能く心にきざみてしバしも忘るゝことなく國の恩にむくいまつるこそ我がくにたみの本分なれゆめ忘るゝな少女ともつとめよや少女たちいさゝか思ふよしを書きしるして紀元節を祝ぎ奉ることしかりあなかしこ

佐々有鄰子

紀元節は大日本帝國皇統の連綿たる天皇の遠祖神武天皇大和國高市郡橿原宮にましまして大八洲を治めたまはんとてかしこき政をしきたまひし吉日なり年ごとの二月の十一日は奥山すみの賤女山かつも旭のみ旗のかげに酒くみかはしめかりしはやくあまの子も學の庭に群居つゝ文部省より撰らびたまひてあまねくをしへさとしさづけられたる紀元節の唱歌をうたひつれつるぞ姿が耳をつらぬきてなんかしこかりける目でたかりける

植木鋼子

二千五百五十年余りかへりみおもふもいとかしこけれど其かみ神武のみかど天の下を平らげ給はんといくその嶮阻をこえ海山の難を凌ぎ給ひ東に西にもろ〳〵のゐびす群かるぞくどもを打したがへ給ひて橿原の宮に御即位まし〳〵しよりあきつの原の民草は皆其みいつになびきやすんじ四の海いとおだやかに鎮まりて此方天御日嗣の御位は絶えず傳へて代々にかゞやき大内山の御榮は猶萬世に

限りなくあふぐ畝傍の山の端にさし登りたる朝日影いともうらゝに賤か家の軒端に立る日の御はたはゆたけき春風に打なびくけふぞ如月の十一日なる紀元節になん

宮川きよ子

つゝしみゐやまひ平伏しつゝおもひみるに紀元節は明治五年といふとしに始めて定め給へる大御式にてやがて神武天皇大和國の橿原の大宮にして大御位にやかせ給ふ大御禮を擧げ給ひし活日の是日にして掛卷くも綾にかしこき天孫命の大御親ら祭らせ給ふいともたふとき大祝日にしあれバ百敷の都大路も天離る鄙もへだていく家毎に旭日の御旗打ちなびかしてぞ祝ひまつれるあなたふとの紀元節やあなめでたの紀元節やへゝしみて古きみふみを考へつゝかくは記しまつるになん

碓井のぶ子ぬしの、紀元節の記は、印刷の際誤りて、脫落したれど、必、次回に掲ぐべくなん。

兼題

二月廿日
歌……水邊鶴
文……勸學の文

三月五日
歌……雛遊
文……紀行

小說女畫師、挿畫と共に掲ぐべき筈にて、挿畫は、既に、彫刻を竣へたりしも、小說寄稿者、俄に旅行せし爲、遺憾ながら、え掲げざりき。媛達、あしくな咎め給ひそ。

餘芳

みちのつと（つゞき）

小池道子

十四日、雨。まゐりたまへる人もあれど、えるすべきこともなし。日比のそゞろありきにや、つかれたりけん。おましのわた殿に、さぶらひながら、ねぶけ、もよほしたるをりしも、めさせたまひて、くだ物たまひたり。茶もてまゐれど、仰せられたるを、かしこまりて、わがどちのと心得て、いそぎとゝのへさせて、もてまゐりたれば。柳原典侍の、何をか、もてまゐりたまへる、奉れと、仰せられたるにと、のたまふ。むねさわぎて、あわたゞしう、てうせさせて、奉りたるに、いぎたなかりけんと、中々に、興せさせたまへるも、いと〳〵をかしかりき。

十五日、雨、いたくふる。壽子君、愛子君と、ひとつ車にて、北野の神社にまうづ。いかめしき、みやしろのうち、よく見奉らまほしけれど、雨、いたくふりて、衣もえばるやうなれど、板じきの上にて、ふしをがむ。千本の松は、いづくぞととへど、此のわたりをいふなりといへど、多しともみえず。平野の神社にもまうづ。いさゝか

の道、車ゆかねど、あゆむほど、いよ〳〵大ふりになりて、せん方なし。花ざかりにて、かたへの家には、あそぶ人多かれど、物みることゝもせず。かゝる日に、まゐるをこそ、神も、うけさせたまふらめど、いひつゝわらふ。

十六日、雨。ことなし。

十七日、曇。午時過ごして、宮、桂の里なる離宮にわたらせたまふ。有栖川宮、山階宮、小松宮、同じ宮の御息所、内大臣、北の方も宮内大臣をはじめ、參りたまへり。日比の雨に、かつら川、水かさまりて、にごれり。はるかにみゆる山のけしき、例の物めでする心には、限りなく、おもしろし。おくのおましにて、いこはせたまひて、みそのに、いでさせたまふ。みこたち、みやすん所をはじめ、みうしろに、さぶらひたまふ。木立、岩など、おもしろく、物さびたるけしき、おのづからなる山水のこゝちす。池のとび石、ひきくなるまで、水かさまされり。松琴亭にて、御茶奉り、ゆるさるゝかぎりは、めして、くだ物など、賜はす。池のめぐり、木ふかきみち、おくふかき山に分入るやうなり。みやびに、たてさせたまへる、かり宮のさま、むかしの故よしなど、人々の、かたりあへるを、かたはらにて、きゝたれど、か

いとむるひまなし。笑意軒とか名づけたるは、つくりざま、ことに、めづらしう、めとまる。奈良の都より、うつさせたまへる、八重ざくら、さかりにさきにほひたり。木は高からねど、苔のむしたるさま、げに、老木なるべし。御その丶まはなる方に、おましまつらひて、御かはらけまゐる。あすより、行幸のみともに、さぶらひたまはん親王たち、大臣たちに、御はなむけのみ心なるべし。御さかづきまゐらせたまひ、人々にもたまひなどす。いぬる演習の折の、うへのみありさまなど、啓したまふ。御瓶子つかうまつりながら、ふと、み池の方をみやれば、わかき女官たち、舟に打のりて、手々に、さををすさま、興有り。さぶらひたまへる人〳〵も、あなをかしと、みやりたまへり。五時すぐるころ、内にはかへらせたまひぬ。

十八日、てけよし。うへは、神戸にて、軍艦の観兵式をみそなはしたまひ、呉、佐世保の軍港にも行幸ましまさんとて、大みけしきうるはしう、午前六時四十分に出でた丶せたまへり。宮は、南殿の階下まで、おくり奉らせたまふ。かくて、八時に、宮も、いでた丶せたまへり。かねて、うへの、おきてさせたまひしごとく、奈良、よし野、まひ子が濱など、めぐらせたまはんとてなりけり。日比の雨、などりなく はれ

れて、こゝちよきに、見奉らんと、處々にむれゐる人々は、げに、山しろの山をなしたり。ふしみの兵營にて、やすらはせたまへり。こゝは、桃山城のあとなりとぞ。工兵、ひと日の演習のつかれをも忘れて、かく、やすらはせたまはんことをかしこみ奉り、あらたに、庭をつくり、池をほりたるよし、燈籠など、わざとめかず、つくりなしたる、中々に面白し。まめなる心ばへをきこしめして、はしちかく、いでさせたまひて、御覽す。おましには、工兵の、ことに、巧あるひながたつくりなして、御覽せさす。鮫島中佐をはじめて、事ども、くはしう、啓せさせたまふ。こゝをたたせたまひて、觀月橋にて、水雷火御覽ず。馬やおどろかんとて、おりさせたまひ、馬車はあとよりわたす。やがて、ふたゝびまで、打はなちけるが、その勢、いかなる軍艦も、くだけぬべしと、おそろし。なげ玉とかいへるも、ふたつあり。こもいみじきひゞきなり。かくて、堤を行く道のほど、右は沼、左は河にて、まことに、けしきよし。宇治の上田俊造の家にて、ひるのおもの奉る。まだ、十時ばかりなるべし。朝日山、まむかひにみゆ。かたへの山も面白し。

女鑑第五十五號目次

〔明治二十四年八月八日內務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强いて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月貳回五日廿日發行

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年二月四日印刷
同　年同月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)